明治三十九年七月二十日發行

女鑑

第百拾參號

東京國光社

女鑑第百拾三號　目録

黒柳松光



大海嘯に就きて所感

松の常磐は、寒霜にあたりて、能くあらはれ、竹の節操は、深雪にあひて、自らあらはる。人も、常ならぬ非常の事ゞ出であふや、能く其の人の平生の心がけの、自ら見ゆるを得るあるものなり。こたび悲しくも、怨めしくも、奥州三陸の浦わ磯わの里々を、人ながら家ながら押しも流し去りにたる大海嘯の、これもかれも悲しくいとほしき跡に、斷れ〳〵留められにたる話の、いづれもあはれにかなしくいとほしき事のみなるが中に、殊にあはれにうるはしくいとほしく、其の人たちの平生の心がけも見られて、いとゞゆかしう覺ゆるがあり。そは、孃たちにも、既ゞ聞き玉ひてならむ、さる小學校の敎師なりけるは、海嘯と知るや、取るものも取りあへず、直ゞ校堂に奉置せるかしこき御眞影を守りまゐらせて、馳せて、やゝ離れたる山邊に避け奉り、さて、さすがに妻子の事もき

づかはしく、急ぎ引きかへせば、家ははや怒濤にうち砕かれて、妻子も殘らず見えず成りましといへば、また、さる敎師は、海嘯ときくや、妻子と共に逃れ避けんとしたるが、校堂なる御聖影の事を思ひ出でゝ、妻子も忘れ、身も忘れ、既に吼りかゝれる怒濤を凌ぎて、校堂に取つてかへし、御聖影と勅語謄本とを取り上げ奉り、再び逃れむとするに、逆捲きかへる激浪は、いよ〳〵狂ひかゝれば、幾度か捲き倒され、打ちつけられ、遂に御聖影の函を確と奉持したるまゝ、人心地もあらずなりにしが、波去りて人に呼びいけらるゝや、御聖影の安全におはしたるを見て、二度三度ふし拜みざま、莞爾とほゝゑみて、遂に立ず成りにしといふ。げにも其の心のまめやかにして、その事のあはれなる。げに此の人たちの平生の心がけ、こゝにあらはれて、いともゆかしき限りにこそ。また、さきに女鑑にも記したる、二人の弟を助けまほしさに、自らの片腕片足を失ふまでも屈せず、辛うじて弟どもの玉の緒のつなぎとめ得にしを見るや、かゝれば死ぬるも恨みなしとて、うれしげにうちゑみて、あへなく散りて歸へらず成りにしといふ花の少女

が心、思へばやさしう可憐の限りならずや。平生いかばかりか兄弟を思ひいつくしみけむ、深き心情の、こゝにぞ思ひ知られて、誠にゆかしうなづかしくればゆるなり。

あはれ此の女鑑愛讀の孃たち、事はやゝ異なれど、此の同胞の悲しき災事に臨みて、孃たちが平生のやさしくまめやかなる心情の見らむ振舞こそ、また切にあらまほしく思ふなれ、思へば、慘憺たる三陸の大海嘯幾萬の家は、むなしく海底の藻屑と沈められ、幾萬の人は、あへなく怒濤の泡と碎かれ、たまく生き殘りたる者も、歸へらんに家なく、食はむに、物なく、父母を呼びて沙上に泣き、妻子を慕うて、路頭にあこがれゆき、或は手を失ひ足を失ひて、負傷の床にすがるさま、きくも胸つぶる、無殘の有樣なり。皆これ孃たちやわれと共に、祖先を同うせる同胞なり。天地を共にせる同胞なり。去年は共に平壤の戰捷を歌ひよろこび、共に黄海の大勝を舞ひよろこびし同胞にして、此の春も、共にうるはしき朝日かげに、しきしまの御國の花をもながめたる同胞なり。昨日までも、孃たち

と同じく、御國の御ためにヽ　天皇の御爲めに、父母の爲めに兄弟の爲めに妻子の爲めにヽ自らの爲めにヽ互に相勵み相いそしみたる同胞にして、夕べまでもヽ孃たちと同じやうに、一家團欒して忠君を志し、愛國をはげみ、孝情をつくし、友愛をつくし、相和し相信じ、互に君が代に皷腹しゆきたる同胞なり。そのなつかしき同胞が、さばかりの不幸。かねても同胞相思ひ相いつくしむなる孃たちが同情、さこそ悲しみてならめ、泣きてならめ、悲むべし、心の限り。泣くべし、涙の限り。悲みて同胞の不幸をとへ、泣きて同胞の不幸を救はん道を盡くされよ。而して、孃たちがやさしき平生の同情を示されよ。

このほさの
ねまめのいのち
おやなしに
ふすらんここの
なみたいかにそ

（萬葉集）

論説

三陸海嘯の惨狀を讀て婦女子の至誠に及ぶ

坂本三七郎

人の親の心は暗にあらねども子を思ふ道に迷ひぬるかな、とは是れ千古の名吟にして、また人世親子の愛情を穿ち得たる歌なり。凡そ父母の子を愛するより誠なるものなく、又其の情より厚きはなし。而して父とし母とし、其の愛情に於て厚薄濃淡の別なしと雖ども、若し此の間に於て、或は少差ありとせば、母の愛は父の愛に比して、濃且厚なるべし。吾人近頃三陸海嘯の惨狀を讀み、其の記事中に於て、婦人の死する者多かりしは、一は女性の薄弱柔輭なるに依ると雖ども、多くは其の稚兒愛子を庇護せんとする情に制せられて生地を失ひしもの多きに座するを知る。彼の記事中の一節を讀むに、一婦人の死屍を破屋中に見るに、婦人は膝を起して、將に立たんとし、而して屋

棟壓し來りて逃るゝを得ず。而して一二歳の稚兒は母の膝下に在りて死を免かれ居れりと。此等の婦人は或は死を免かるゝ路ありしならん。然れども一稚兒を庇護せんが爲に、頭足屋棟を支へて、己れ死して猶且つ稚兒を救ふに急なり。婦人が子を愛する情の切にして誠なる、死に至りて且然るを見れば、豈に天下の愛は是に至りて極れりと云ふべし。

故に愛に於ては天下之に及ぶものなしとせば、之に從ひて子に對する事は一も虛なることなく、又僞なることなし。然らば則ち誠の愛情を以て子に臨む、必らずや子が之に感化し、之か薫陶を受くるは深くして且厚かるべし。深くして厚ければ、之か感化薫陶は子をして第二の天性を養はしむ。是に於てか之が第二の性を養ふものに善惡あるは是又何ぞや。愛情の極を以て子に臨む必らず善なるべく、決して惡なるべからず。父母の子を敎養する至善なり、至誠なり。誰か子の惡を欲せんや。また誰か子の邪路に入るを欲せんや。同一の愛情を以て敎へ且養ひて子に善惡あるは、是れ愛の罪にあらずして、愛情を用ひて子を敎ふる方針を愆ればなり。是に於てか女子敎育の有無は子女敎養に關し一家の盛衰に關し一國天下の消長に關す。然らば則ち女子敎育に必要は多々、其の原因あるべしと雖ども、愛情は女子の特質なり。この特質をして正道に至

誠に、子女の頭腦に涵養せしむるは、家庭上敎育の一要素なりと云ふも不可なきが如し。何となれば婦人が最大の任務は子女を敎養して正當一人前の男たり女たらしむるにあればなり。之が爲に女子敎育の道は愛を導く神使なり。三陸婦人の死狀を讀み、吾人は更に婦人が子を愛する情に深きを感じ、併せて之に依て之の愛情なる者をして、一層推開して利せむ感化の功其の細は内なく、其の大は外なき極致に達するを知るなり。

然らば婦人が其の子女を敎養するに於て極訣は果して何れの邊にかあるべき。吾人思ふに子女敎養の道は所謂嚴正なるを要し、至誠なるを要す。嚴正は則ち苟息の愛を誡すべく、至誠は則ち愛を達する道なり。「ワシントン」の母が常に其の子を敎養するに曰く、人は自から其の身を成すものなりと。嚴正以て其の身を持し、勤儉以て其の家を治め、以て愛し以て敎ふ。「ワシントン」か母の敎訓は人世最大の兒訓にあらずや。「ワシントン」一生の行爲實に慈母が敎戒の話言より成るを見るなり。

今日の婦女子敎育少きにあらずと雖ども、子を敎ふる道に至りては、寧ろ愛に偏して其の正しきを得ず。所謂子を敎ふることを學んで後嫁するものなしと難せし古語今尙明治敎育ある婦女子中の戒言となさんとする狀あり。讀者諸孃何ぞ少しく省せざるや。

三陸の慘狀を讀み婦女子罹災の段に至りて感に堪へざるものあり。爲に愛情開推擴充の事を記して世の婦女子に問ふと云ふ。

女子教育一班（三十一）

三輪田眞佐子

わきて女子は一般に感情強きを以て、良妻賢母の傳記などを讀み、あるは貞婦烈女の肖像などを見ることとえど〳〵すれど、知らず識らずして、同情を催し、同志を起し、自らを以て彼に擬へんとするものなれど、亦この効を用ゐて、女德を助け進めむもよし。

されど今日女德を養ふ上につきての急務は、なほ女子をして實に感涙を流さしむるどかりなる歴史中女傑の傳記などを根據として、和漢洋を問はず總て女教の粹と言ふべき明論卓説を加へ、以てわが國情及び當今の時運にもとらざる如き教科書を出板するにあり。且つ女學校の倫理講堂などにも、模範と仰ぐに足るべき女傑の畫像を掲げ、女生をして日々これを欽慕せしむるは更なり、もしその校の先輩女生中にも特に歎賞すべき効績ある人あらむ、その肖像なども掲げて後進の女生を奬勵せしむべし。

その他遊戯をなし、装飾をなすを始めとして、女子一身のことは更なり、一切女子を

圍繞する境遇をして女德を助くるやうつとむべし。愚なるかな。蒔かざる種の生ずるを待つものは。女德の因を作らずして、女德の果を求むるものはさながら蒔かざる種の生ずるを待つものに等し。

以上はわが女子の德育に對する希望の一班なれど、元來情は極めて切なるものを、言はなるべく省かむことをつとめしかど、敢て項目を分たず、從ひて讀者にその要領を通ずること能はざらむは遺恨のことにこそ。されど今わが最も重を置く德育を施す方法の基くところを左に概括して以て本篇を結ばむ。

第一　自悟　そも〳〵道德は人のため止むを得ずして行ふべきものにはあらず。自ら歡びて爲すべき性質のものなり。故に心根より有德の婦女とならむとならば、道德の人類にかくべからざる理を自悟する工夫をなさゞるべからず。こたび三陸地方海嘯のため幾萬人の同胞が一夜の夢に命を失ひ、生き殘る家族どもさへ住むに家なく食ふに米なき慘況を見、あるは聞きなどして、我等若し彼らと位地と運命を更へなば、如何むかり苦しからむと、同情を催せば、つねに綾羅の衣服を纏ひ、山海の珍味に飽きて、物の哀れ、人の悲みを知らざる婦女たちも、一念茲に及べば、おのづから慈善の必要を悟ること深からむ。況んや身自ら人の情によりて救はるゝ境遇に陷るものは、決し

て道德の必要を覺ゆること淺からず。唯不思不感の時は毫も道心起らざるべし。されど女德養成の工夫は天地の事柄を能く觀て、以て沈思默想し、自ら道德の觀念を得るにこそあれ。

古より聖人の域に達し、あるは賢人と崇めらるゝものもさまで他人より訓戒を受けしものにはあらず。孔子釋迦あるは耶蘇などのことを考ふれど、唯德を修むる工夫は先輩の一語一句の敎を能く弄味し、深く心肝に銘み、あるは山川草木鳥獸など、總て宇內の事物を見て、理の曲直、道の正邪を判加する心をも養ひしことは疑なし、これを以ておのれは上に述つる德育の方法につきても、居所の淸靜なる、敎師の純潔なるを撰び、且つ古今良妻賢母の傳記などを讀ましめて、自ら道德を悟る機會を與へんとのみつとめけり。讀者その心して老のくりごと煩しからめどくり返して讀み給はゞ、こよなき幸になん。

第二　習慣　こは頗る德行と關係あるものなり。元來年少にして未だ道理などのことを深く考ふる智識なきもの、或は天性道心薄きものどもは、上に述つる如き自悟などは望むべくもあらず。由て此の類の人のため家庭に在ては更なり、學校敎師若しくは一般長者たるものが固く惡事を禁じ、能く善事を勸め、その始めは止むを得ずして行

ひしことも、志らず〳〵一種の習慣となりて、後には善をせば心氣ために清快を覺え、惡事をなせば良心ために苦痛を感ずるやうなりてこそ始めて聖賢に近くべけれ。況して道德は理屈のみを言ひて導き得るものにはあらず。多くは感情のため支配せらるゝものなり。たとへば祖先を敬する習慣の家に生れし人は、靈魂の有無を知らざるも、片時だに祖先を忘るゝことなく、朝夕合掌して禮拜するがごとく、總て道理よりも感情によりて普通の德行は實踐し得るに至るめり。さてその感情は習慣のために多く養はるゝものなり。されば習慣と道德は離るべからざる關係あるものと言ふべし。勿論道心の源は良心にあるも、その良心すら習慣のため少からざる影響を受くるめり。故に人は習慣を愼むべし。實例をもてこを言へば、歐米の女子は男子に先ちて行き、且つ男子女子のために席を讓ると、我國の風俗は全くこれに反せり。彼こを說きて曰く、強者弱者を助く、と我これを唱へて曰く柔能く剛に從ふ自然に法ると、要するにこは各眞理ならむも、その極端に馳するを知らざるに至るは習慣のためならむ。故におのれは女子の德育に就き校風を盛にし寄宿舍を改良することを始め、日時の行爲に規律を定め、善き習慣を作り以て女德を助成せしめんとせり。

女子のたのしみ（つゞき）

壚井ふく子

本多忠勝が絶命の歌に

　　死にともなあら死にともなしにともな
　　　御恩をうけし君を思へば

と云へり。げにや、忠勇絶倫君が馬前に一死を鴻毛に比せし大丈夫が、かく死を惜みしは、君恩重くして、未だその萬一にも報いず、臣下としての分を盡くさゞればなり。大石良雄が辭世に、

　　あらたのし思ひははつる身はすつる
　　　うき世の月にかゝる雲なし

と歌はれしは、千辛万苦、やう／＼に亡き主君の仇敵をうちとめ、臣下としての分をつくしたれば、心も思ひもすみ渡りしならむ。學ばざるものは、徒らにうまく食ひ、やすくいね、遊佚、飮食に飽くを以て樂しみとなす。されど書を讀みていさゝか事理を知れる人には、其の爲すべき事を爲し盡さゞる事ほど、苦しきものはなからむ。例へば、學校に通ふ身の、日々の課程をおろそかにし、はては學校をさへ休みて、他に遊行すとも、その本心はやましき所ありて、眞に樂しきものにはあらず。よく課程を修

めて、學生たる分をつくし果てなば、心は何となく樂しきものなり。人間萬事、すべてみなかくの如し。分に應じ、職に從ひて、それぞれ一日の業をなし終へて、家に歸れば、其の樂み必ず陶然たるものあらむ。一日は一日の分をつくし、一月は一月の分をつくし、一年は一年の分をつくし、人の一生、ひとたる分をつくしなば、また外に何をか求むべき。饑ゑたる時の食は、よしや粗なりとも、八珍の味、自から其の中に存するを覺ゆ。爲すべき事をなし果てたる時の樂みは、何物か、それにまさるものあるべき。何事をも世につくさずして、徒らに山水をもてあそぶとて、いかでそれを仁者といはん智者と云はん。また、あまるばかりの財を有ちながら、徒らに貧しげを好みまねびたりとて、何かは聖賢に比へられん。また、學問は、もと、理をさとり智をひらくためなれば、いとやんごとなきものなれど、さはいへ如何ばかり文のたのしかればとて、萬事をうちすてゝ、終日几案に向ひたりしとて、何の益かあらむ。貝原益軒が人は自然のたのしみにしくはなし。内の樂みを以て本となし、耳目を以て外の樂しみを得る媒とせよといひたる。そも内の樂しみとは、何ぞや。自然のたのしみとは、何ぞや。如何に一錢をも費さず、人にも求めずして、はしいまゝに山水月花は見るべく、あくまで見るもつくるものにはあらじと云へど、己れが分己れが職をつくさ

ずして、月花の主となり友となりたらんとて、如何でか天地の容るすべき。ゆるされざるを求むるは、乃ち欲なり。欲ありては、如何でか自然を得らるべき。自然は即ち天より與へられたるまゝを爲し、つくし而してたのしむが、即ち自然のたのしみなり。故に、天、我を人と生みたらば、乃ち、人の分をつくし、士に生れたらば、士の分をつくし、農に生れたらば農、工に生れたらば工、商に生れたらば商、各その行ふべき事をなすを、自然とは云ふなり。

女子の分、即ち、女子の爲すべき事とは、何ぞや。曰く、家を守るなり、舅姑に事ふるなり、夫に事ふるなり、子を育つるなり、此の本分をつくす能はずして、徒らに高樓に住み、錦衣をまとひ、美食にあき、美をてらひ、貴をほこり、或は空しく才名を得るとも、その良心、いかでか樂しかるべき。此の分は、貴賤を通じて一なり。古今に照らして、曾て謬らず。世の人、やゝもすれば、粗服をつくるを恥ぢ、生花、茶湯あるは、奏琴に通せずば、貴婦人の資格を欠くもの心も和せずして共に樂むに足らぬものとするもあれど、孔子は己れの多藝なりし所以を語りて、少うして賤し、故に鄙事に多能なり、君子は多ならんや多ならずと云はれたり。また、子夏もいひしにあらずや、賢を賢として色に易へ、父母につかへて、能く其の力をつくし、君につかへ

て、能くその身をいたし、朋友と交るに信あらば未だ學ばずと雖ども吾は必ず之を學びたりと云はんと。父母につかへて孝をつくし、夫に事へて貞をつくし、子を育てゝ慈をつくし、家を守りて、能く榮えしむれば、無用の才はなくとも、無用の遊藝は知らずとも、白日青天、國家の女子たるに恥ぢず。國家の福祉は家庭に胚胎す。家庭を守るべきもの、其の分と其の樂むべき所とを知らざるべけんや。

（完）



史談

黒柳松光

墟井ふく子

平らかなる野をながれて湍に激し岩に躍る奇觀なきも、卑につきて流れ行く水の性はつゆかはることなく、そのわくまでも清きは、鑑となすに足りぬべし。こゝに、妻たり母たるものゝ摸範となさまほしく、志も操もいと高くいとかたき女子あり。その名を黒柳松光といふ。初めの名をれ孝と云ふに、行ひつゆはづる處なく、親につかふるは云ふも更なり、夫にかしづき舅姑につかへまた子を敎ふるにも誠心より愛敬をつく

して、終始たゞ一の如くに、百行とゝのひたる婦人、その父は紀伊侯に仕へて先鋒隊に補せられたる人にて、その名を黒柳重之とよべり。松光は生れつき、敏捷にして、よく人の善惡を知り、且つ飽食暖衣逸居して、日を空しうするを好まず、幼より裁ち縫ひより初め、苧み、績ぎ、祭禮、賓客のもてなし、旦夕の事まで、すべて、女子のつとむべきわざを、よく學び習ひて、いたづらに月日を過ぐさざりしは、誠に感ずべき事にこそ。

長じて松本定章と云ふ人にとつぎたりしに、よく婦女の道を以て、夫にやさしう從ひ舅姑にまめやかにかしづく事、聲なきに、形なきに、よくくろの意をさとり、志をうくる事生みたる親につゆ異なることなかりけり。かくかしこき孝女の赤心もても、行く水はとゞむるによしなかりけん。ひきつゞき〳〵父母舅姑、夕のあらしにみなもとの根にかへりはてゝ、またとふ事も語る事も叶はざる人となりたる果敢なさ。樹しづかならんとすれど、風やまず、孝女の心の中や如何なりけむ。

此孝女は、人の善を稱する事を好みて、如何なる小なる事も必ずそれをあらはし、惡しき事はれだやかにさとしきかせ、人の患を恤むことを樂み、その己れを待する事は甚重く、少しにてもわしき事と知りては、決して重ねてなさず、誠に古の烈女の風を

備へし故に、從ふもの皆よろこび和して、和風常に屋中にみち〳〵たるぞめでたき。

いにしへ韓文公、そしりのもとを說きて曰く、古の君子はその己れを責むる事重くしてあまねく、古の人に舜なるものあり、その人となり仁義の人なり、その舜なるものを己れにもとめて、彼れも人、予れも人、何とて人はよくして、我れはよくせざるぞとて、おきて思ひ、臥して思ひて以て己れをつゝしみ、その他周公の如く孔子の如くならん事をみな己れに求むる故に、自ら己れの過の日に〳〵うすくなり行きて、遂には全く善人となるを得。その人を責むるや輕くして約、彼の人はよく是の善なり、以て良人たるに足る、よく是をなす、是れ藝人たるに足るとて、その一を取りてその二を責めず、故に人善をなす事をたのしむ、さるに今は然らず、彼の人は之をよくすれども何ぞ稱するに足らんや。己れの未だ善もあらぬに、我れ之をよくす是れ足れりと以て己れに求めず、而して恐々然として人の聞ゆるを忌む。故に人も之に習ひて、人をそしり、人をあなどり、人をおとしいるしかく〳〵と。男子にてだに然り。畢竟女子養ひかたし、そねみ深く恨みやすきが故なりなどいはれしも、もと心せまくして、人のほまれを恐れ憎み、己れの身を省ることのうすき故なり。今此の韓文公の言を考へ松光の行に照らし見て、世の人、まづ己れをかへりみむ必ずさとる所あらむ。

松光また子を敎ふる事、つとに方あり。男子には則曰く公を先きにして、私を後にし、官務にのぞみては家事を顧みず、身命をなげうちて、國のため、君のため、誠をつくせよと、女子にはまたさとすやう、貞順愛敬の心をむねとし、よく身を守り、いたづらにさからはず、言葉にこやに、萬うや〳〵しく、いかる事あるも容姿にあらはさず身もち、きぬきの底清くし、起居ふるまひしとやかに、勤儉に從ふべしと。此言の葉をもて見るも、女子の四德のそなはりし人なりし事は知られつべし。されど麟の趾、振振たる公子于嗟麟とて、親、親たれば、子もまたかしこく、みな材をなして、其家によろしき事を得たりしと云ふ。

その後寡となりてよりは自ら松光と號して、かたく操を守り、花を稱し、月を玩び、時に古歌を誦して以て自らたのしみ、老いを過ぐしたりしとぞ。あはれ、しろがねもこがねも玉も何せんに、子にます寶世にあらめやもとは親の情、世の寶、國の寶とすべきは實に賢人君子、良妻賢母なりけり。

野口某が妻松女

薰風仙史

松女は姓を小澤氏といふ。武藏の國の人にして、利根川のほとりに住めり。人となり

て野口某に嫁ぎけり。さていくほどもなくて夫奇病をわづらひて、かほかたち醜くなり、手足ひきつりて、癈人となれり。されど業をつとむることをえずして、家の財は更なり田畑をさへうりつくして家もまづしくなり召し使ひつる下部とゝもにげ失てけり。後川のほとりのかたへにさゝやかなる家をかまへて住み、松女は日ごとに人にやとはれて、その代をもてからくも夫を養ひてすぐしけり。父小澤氏は家ゆたかなれども、かの婿の惡疾をきらひていかにもして離婚せしめてんと思ひて、さま〴〵にいひさとせども松女の心はいさゝかも動かんやうもなし。されどまづしさにこらさしめて其心を變させてんと思ふ心ありて、いさゝかもめぐまず。松女か心はいよ〳〵かたかりけり。夫これをあはれと思ひて婚を絶せんといふを、松女きかずして笑ひていへるは、人のとめるまづしきは、はやく生れざるさきに定まれるなり。いまわが家かむかり貧くなれりとて、君をおきて又いづこにかゆかんや。女として夫二人につかへて永く不貞の名を後の世までにのこすべしやは、夫の爲には火にも水にもなどか惜むべき、ゑうなきものおもひして御心をないためたまひそ、何事もたゞ妾のなさんまに〳〵まかせたまひてよとて動くけしきもなし。かくて夫思へるやうはわれ不幸にしてかゝる惡疾をわづらふ。われあるが故に妻をして苦ましむ、われもしなからんには又よき

事もあるべしと思ひて、夜の更けぬるにひそかに家を出でゝ身を流にしつめてんとしけるを、松女さとりて追ひゆきて後より抱きとめていへるは、君もしかしたまはんに、妾いかで一人この世に生のこらん、いざともせんといふを、夫もさすがにれもひて遂に思ひとゞまりてけり。かくて後十年餘をへて夫遂にみうせにけり。松女かなしむこと大方ならず。喪に居ること三年。つねに夫のありし世につかふるが如し。幕府の士石谷將監このことを聞きて大に感して、婦女の鑑なりとて郡司とはかりて、家を與へて褒賞してけり。郷人も感し合ひて尊敬せさるはなかりけり。延寶年中年老いてみうせにき。難に處りながら其操をかへさりしは實に千古の鑑と稱へつべし。

さきたゝしとまらしとこそおもひしか
ちきりしかひもなきわかれかな

（源時賴女）

いけ花（二十）

田邊和氣子

ひあふぎ

ひあふぎは葉のひろごりて、多きものなり。又露どかりもため直す事なりがたけれど、自然のふりによりて眞体副を見斗ひて活べし。花の



處のそりたる形を以て、眞と副とを見合たる樣組合せ、体は眞を仰ぶぎ見るすがたにすべし。葉は多く重りて差支る所切りとりて、恰好よくなして三本又は五本活るをよしとす。またひあふぎを眞副とし、体に他の草花を用ることもあるなり。

柴苑

柴苑は秋のものなれど、すすみ行く大御代になれて咲始めたれど、活方を示すなり。此花は葉にて眞副体の形ちをなして、五枚七枚都合によりて活け、其中より花の生じたる如く、二本活る規則なり。いか程花瓶大にして、花も多く活まほしくれもふとも、二本にかぎるものと心得てよし。此花は砂鉢に活るをよしとす。また他の花を活け交へず、此花を外の根〆にも用ゐざる法なり。

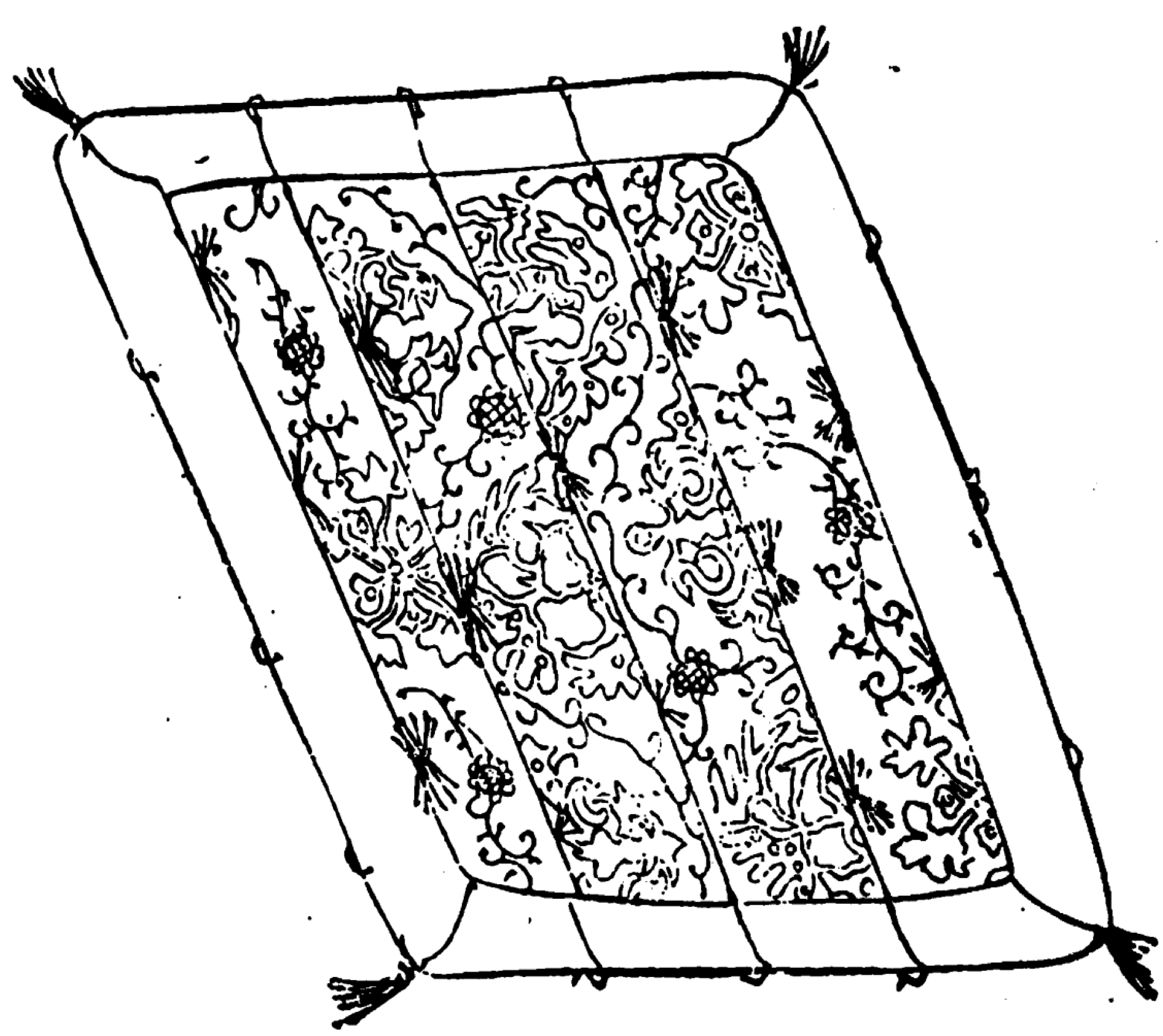


たちぬひ

西山たい子

(四十) 五布蒲團の裁ち方

裏表とも同じにたちて、三布蒲團の如くに縫ふもあれば、それは、ざつのものにてたち方もぬひ方も殊更に申たつべき處もなし。今少し丁寧なる方は、表を四布になし、裏をば六布になして、丈けをもまた二布だけ、即ち九寸巾の品物ならば、一尺八寸だけ、裏の方を、表より長く裁ちれくべし。故に表を四尺二寸に裁ちしときは、裏を六尺にたつなり。皆そのわりあひにしたがひてたつべし。さすれば、横も、縦も、四方皆同じく半巾づゝ、表へかへり出るやうになるなり。



(四十一) そのぬひ方

まづ表の布をまつすぐに四巾ぬひ合せ、次に裏の布を、六巾縫ひ合すべし。(但し、裏の方は、眞中の布のはぎめを、二三尺あけおくなり。)裏表ともにはぎ終らば、表の眞中のぬひめと、裏の眞

中のぬひめとを、よく合せて、まづ上下とも、縦を裏表はぎ合すべし。(但しはじの方を二三分縦の縫ひしろだけあけおくべし)縦をはぎ終らせ、裏の方、表より長くなしおきたるものだけを、上下同じやうに出して、横をも裏表合せてぬふべし。左右ともさやうにはぎ終らせ、四隅のかど立ちたる處を、三角に縫ひ、三布蒲團の如くにして綿をのせ、四隅、及びまはりをとぢつけ、裏のあけおきし所より、ひきかへしてくけ、縦横ひきのぞして、よきほどにとぢるなり。

ぬひめには、しつけをかけおくべし

だいどころ

氷菓子の製法

鷄卵の蛋黄十個に、牛乳四合、砂糖半斤を加へて、能くかきまはし、鍋に移し、かきまはしながら、ざつと沸騰たせ、其沸騰つを待ちて、直に火より下して、鍋のまゝ冷水に冷し、其ひえたるを待、小匙半杯のレモン汁を和し「ブリッキ」製の筒に移し蓋を爲し、深き桶に入れ、筒の周圍に鹽と氷を投れて、たえず動せば、凡二十分間位にして、筒中の混和物凍りて、上等の「アイスクリーム」は出來るなり、但し桶は機械附の桶を用ふる方宜し。

麥水

大麥を能く洗ひ、乾し置、是を炙釜にて炙り、藥鑵に入れ、砂糖少しを加へ、熱湯を投じ、二三十分間文火にて煮詰むべし、既に出來たる頃、粗き篩嚢にて漉し、冷し置き、其冷めたるを待用ふべし、又瓶に詰め、口を爲し井中に浸け置用ふれば、冷かにな

りて暑中の飲料には尤佳なり。

レモン水

四個の「レモン」の皮を去りて、薄くへぎ、荒目砂糖三十匁と共に、壺に入れ、又「レモン」の汁を壺の中に絞り込み、之れに凡三合の熱湯を注ぎ、蓋を爲し、其冷めたるを待、之れを漉して、瓶に詰め置くべし。其用方は、水呑に大匙二三杯の「レモン」水を投れ、之れに少量の剝篤亞斯と炭酸曹達とを和し、清き冷水を八分目まで、注して用ふべし。夏日の飲料と爲すに妙なり。



日本文典（十四）

鹽井正男

動詞に、いろ〳〵の意を有たしむる事に就きて、かつ〳〵述べ來れり。なほさま〴〵あれど、そは助動詞と申す詞の品を申さむ所にて、詳しく申すべき故に、こゝに筆をとゞめ置きて、これより、動詞の時と申す事に就きて、あらましをかいあげむ。

動詞の時

同じ動作にても、有様をいふにても、そのいひさまによりて、既にその動作の過ぎ去りしなると、これ

に反して、いまだ來らざるか、やがて來らむずるなると、また過ぎ去りにしにもあらず、いまだ來らざる將來の動作にもあらず、現在まのあたりなる動作をいふとの三種の區別あるべし。例へば、「風吹きけり」「雨ふりぬ」などいふ時は、今、現在に「風の吹く」にも「雨のふる」にもあらず。過ぎにし時に、「雨がふり」「風が吹きし」なり。故に、過ぎにし動作となる。されど、これに反して、「風吹かむ」「雨ふらむ」といふ時は、過ぎにし事にもあらず、まのあたりにもあらず、未だ吹きも降りもせぬなり。やがて後に吹きも降りもせむ事にて、いまだ來らざる、或は、やがて來べき動作となる。また、「風吹く」「雨ふる」といふ時は、まのあたり現に「風がふき」「雨がふる」事にて、過ぎにし事にも、未來將來の事にもあらざるなり。

動作をあらはす。吹く、落つる、敎ゆる」は皆連體

かくて、大やうをいはゞ、動詞の時は、現在と、過去と、將來或は未來との三種あり。即ちおなじ動作をいふにも、現在なると、過去なると、將來なるとあり。而して、自らこれをあらはす法あり。

現在　現在の動作をあらはすには、普通なるは、動詞の終止の格にてあらはす。例へば、「終夜文かきならふ」「朝早く起く」「父母の敎へを受く」「嵐山に花を見る」などいふにて知るべし。ならふは四段に活く動詞にて終止の格なり。起くは上二段に活く動詞にて終止の格なり。受くは下二段に活く動詞にて終止の格なり。見るは上一段に活く動詞にて終止の格なり。斯く普通には終止の格にてあらはす。若し前に「ぞ、や、か、なん」の如き係詞ある時は、例へば、「風ぞ吹く」「花や落つる」「父か敎ふる」「母なん敎ゆる」といふやうに連體の格にて、現在の

の格なり。また前に「こそ」といふ係詞ある時は、「終夜文こそかきならへ」といふやうに、已然の格にて、現在の動作をあらはす。これらは、皆普通の現在なり。」

また、「車めぐれり」「花にほへり」といふやうに、四段に活く動詞の連用の格に「てあり」といふ詞を添へて、而して、これをつゞめていふ時は、今現に、まのあたりに續き居る動作をあらはすやうに成る。これを全現在といふ。「車めぐれり」は「車めぐりてあり」といふこゝろにて、「花にほへり」は「花にほひてあり」といふこゝろなり。而して、今、現に其處に「車がめぐり居り」「花がにほひ居る」をあらはせり。普通と現在との區別、よく／＼わきまふべし。

過去、　過ぎにし動作をあらはすには、ろの動詞の連用の下に「つ、ぬ、たり、けり、き」などいふ助動詞を添へてあらはす。而して、現在に近きと遠きとによりて、そが中に自ら三段に分つべし。即ち、動詞の時の過去に三段あるなり。現在に最近きを第一過去（或は小過去）といふ、やゝ遠きを、第二過去（或は中過去）といひ、最遠きを第三過去（或は大過去）といふが、普通の文法皆の稱なり。

第一過去　今正に終りたる過去の動作をいふにて最現在に近きものなり。これは、その動詞の連用の格に、「つ、ぬ、たり」（今の世上の口語には、此たりのりを略きて、たとのみいふ。風が吹いた雨がふつたの如し。）これらの助動詞の語尾の變化即ち活用の事及び區別等に就きては、助動詞の所にていふべけれど、こゝは唯大やうなり。

わが心なぐさめかねつさらしなや
をばすて山に照る月を見て。

ますらをと思へる余もしきたへの衣の袖はとほりてぬれぬ

何事ぞ、生昌がいみじうおちつるはと問はせ給ふ。あらず、車の入らざりつることいひ侍ると申して下りぬ。同じ局に住む若き人々などして、萬の事も知らず、ねぶたければ、皆寢ぬ。(枕草紙)うち笑ひて、やゝさらに知らずと口ひきたれて、猿樂しかくるに、數させしとてさゝせつ。(仝)

苗代の水はいなゐにまかせたり、
民やすげなる君が御代かな。(金葉集)

思はずに時雨の雨はふりたれど、
あま雲晴れて月夜きよしも。(萬葉集)

たりと用ふるも、ぬを用ふるも、全く同じやうなれど、つを用ふると、ぬを用ふるとは、やゝ異るやうにて、古の國語學者も、いろ／＼あげつらひて、或はつは他動をうけ、ぬは自動をうくといふ。例へば「日を暮らしつ」といふは正しきも「日をくらしぬ」といふは正しからず、これくらすは他動なれど、つを添ふべきも、ぬは添ふべからざればなり。又これに反して、「今日も暮れぬ」といふは正しきも、「今日も暮れつ」といふは惡しきなり。これ「暮るは」自動なり。故にぬを添ふべく、つは添ふべからざればなりといふ說あり。或は然らむ、されど古今集、枕草紙などには、既に、さる區別定めず用ひられたり古今集の歌に

鳴きわたる厂の淚や落ちつらむ
物思ふやどの萩の上の露

とありこの落ちつらむの落ちは自動なり。さるに落ちつらむといへり。その他枕草紙などには、あられ

めてあぐべきまでもあらず、つもぬもさる區別は更に覺えず。

また一說には、つとぬとは、時の度に深淺の別ある如し。ぬは未來にも用ふれど、つは此の事あらず。

後撰集に

さゝがにの蜘蛛のすがける糸よりも
心細しやたえぬとおもへど

といふ歌あり、此の歌の意は、今は斯くあるも、やがて何時かはたゆるならむと思ふ故に、まことに心細く覺ゆるといふなれど、たえぬはたえむと、同様なる意の如し。故に未來なりと覺ゆ。

歌の栞（三）

鹽井正男

歌殊に彼の三十一文字などの短き歌は、いはむと思ふ心情を、表面よりあらはにうちつけていひ出ですしてつとめて、裏面より詞をまはしてよむべき事を示さむために、前回の末にあげ置きたる業平朝臣の歌と、貫之ぬしの歌

戀ひせじと御手洗川にせしみそぎ
神はうけずもなりにけるかな（業平朝臣）

つらき人忘れなむとてはらふれど
みそぐかひなく戀ぞまされる（貫之）

二首いづれも、人の戀ひしき心をよめる歌なり。忘れむものと願へども、戀ひしうて戀ひしうて、忘られがたき心をよめる歌なり。前なるは、業平朝臣が、人の戀ひしさにえ堪へず、いかにもして忘れ果てむと欲すれど、とかく思ひ出でられて忘れがたきに、今は神々の力を賴みて、此の心をはらひやりてむと思ひて、神々にねぎかけ、御手洗川に出で立ちて、

みそぎを爲し、はらひやりはしたれど、それにつけても、またなほ更にとかく思ひ出でられて、いよ〳〵戀ひしくのみ覺ゆれど、かくとよめるなり。貫之のも全じ心をよめるなり。

げに、れなじ心をよめるなれど、そのよみざまは、いたく異れり。上の三句は同じやうなり、されど下の句にて、業平は「神はうけずもなりにけるかな」と泣き、貫之は「みそぐかひなく戀ひぞまされる」と嘆じたり。業平は、祓ひたれども、神はわが願ひをうけずにしまつたりと泣き、貫之は、はらひたれど、はらひし効なく、反て、いよ〳〵戀ひしくなつたと嘆じたり。その心は、業平朝臣も貫之ぬしも、つまりは同じ心なるなり。業平朝臣は、神がうけずにしまひたりとはいひたれど、その心は、決して貫之のに變らざるなり。やはり同じく、はらひたれど、そのしるしなく、反ていよ〳〵戀ひしくなりしのみなりといふ心をうたへるなり。たゞ、貫之ぬしは、ありのまゝを、表面より、それとのみにうちつけていへるなり。はらひしかひなくいよ〳〵戀ひしくなりたりとのみ、表面よりうちつけたるなり。業平朝臣は、表面よりうちつけざるなり。忘れんやうにと、神をたのみて、みそぎてはらひたり、されど、そのかひなく、戀ひしさはいよゝなり。されど、此方のみそぎを神がうけずにしまひしなり、神がうけしものならど、此の戀ひしき心は忘らるべきを、さなきは、神がうけたまはざりし故なりといふ所より、いよ〳〵戀ひしうと、表面よりあらはにうちつけずして、神の方に、なして、まはしてよめるなり。故に、おのれは、そのまはしたる所が、あらはならずして面白しといふなり。貫之ぬしのは、あらはにうちつけたるが、

やゝ見れどりしてればゆるなり。さはいへ、ありのまゝ思ふまゝを、表面よりそれといひたるが、必ず面白からずとはいふ能はず、なか〳〵に、ありのまゝ、思ふまゝを、表面よりそれとうちつけたるが、たゞへにたゞへたる心情の自ら溢れ出でゝ、ゑもいはぬ色のにはへるもあり、うちわぐれど、露か雫か、はら〳〵とちりかゝるとればゆるむかりに、いふぞかりなき限りなき情のこもりてゆかしきあり。例へば、貫之ぬしの歌に、

君まさむ寒さも知らじみよし野の
　よし野の山に雪はふるとも
玉ぼこの道の山風寒からむ
　かたみがてらにきなんとぞ思ふ

ありのまゝをいへるなれど、無限の心情のこぼれ出でゝ、なつかしき姿なり。なほ、景色をよまむなどには、殊にありのまゝをいはむに、ゑもいはぬ面白きながめあるものなり。

はちすはのにごりにしまぬこゝろもて
　なにかはつゆをたまとあざむく

漫録

あさせのしるべ（つゞき）

故人　藤井高尚

よきなかには垣をせよ

よき人どちのことはしらず、なみ／＼の人のまじらふ中はあまりにしたしくなれ／＼しくては、その心しらひせざれどかたみにうらむるふしどもかず／＼出きていかにこゝろやすくうちとけたる中なれども、かくやはすべき、かうやはいふべきと、おもひおもひてはて／＼はかへりてうとくなるものぞかし。されどいかでかり親くても、いさゝかは心おきもし、あまりにうちとけてなれ／＼しくはふるまふまじく、明くれにしど／＼ゆきかひなれぬとも、われと人との隣さかひはいりみだるまじく、中垣どかりのへだてはつねにこゝろあるべきことなりけり。

鷲はたてども跡をにごさず

人はなからん後の世にそしらるまじく、つねにこゝろあるべきことなり。さらでも久しう住なれたるところをはなるゝときは、かならず人にしのむるゝふしをもなしれくべくこそあらまほしけれ。ねならぬ梅がゝは人のもとに折てやりたるあとのなごりさへ猶なづかしくればゆるぞかし。

のみといはゞさい槌

人の硯とこひたまはゞ、水かめをもぐしてまゐらせ、せうそこぶみかきをへておしまき給ふほどには、そくひのりをこゝろゑていたすやうに、すべての事つねに心とき人ならでは、ことゝあるをりなどもちひがたし、ものまなぶにもふるき書を見てうたがはしきふしをひとつふたつまなびのおやにとひききたらんに、そのときごとをもてはなれたることにもおもひわたして、數々みづからあきらめしるほどのいたりなくてはなみ〳〵のものしり人にもなられずやあらん。　（未完）

軒の糸水（二）　あめ

六、秋篠の與平の事

生駒山を越ゑける日、秋篠といふ村はつれに、如意輪觀音を安置せる堂あるに、さすが名におふ山色風景郊野の眺めの面しろけれど、此の堂に立ち寄りて、煙草くゆらしけるに、堂守とおぼしく、片目しひたる男の、卒都婆を造り居たるを見て、主は細工せらるゝにかとゝへに、削りさしたる卒都婆を側におきて、圍爐の灰かきならし、かんな屑焚きて、ふるびたる鑵子に湯をたぎらせ、茶澁のつきたる茶碗を、丁寧にあらひそゝぎて、大坂より貰ひし茶なりとて、懇に煎じくれぬ。予も、心よく二三椀を喫して、しばし憩へるに、主のいへるは、我は、もと此の地の生れにてもなかりしが、もと、調度のさし物を職として、二十一年ばかりは、京にくらしつれど、不幸なることのみ、うち續きて、歳はより、目も惡かりけれど、少しのしるべをたより來て、今は、此の地に老い朽ちぬるなり。世に茶の湯といへること

も、はじめは、かゝるすさびより起りけるにやなどいひつゝ、菓子を椀に盛りて出だしつれど、とりてみるに、たゞらめの芽に、味噌をくるみて、炮りたるなり。珍らしき口取かなとて、いとうまく食ひて、茶も數椀を過ごしけるに、主の申すは、我等京に在りし頃、數々の茶人宗匠などに親みまゐらせて、茶席にも迎へられ、薄茶たつることも習ひればね侍べりたるが、大かたの人は、茶の湯を、別のことのやうに心得給ひて、誂へものなども、いといむづかしく候。東山にて、何庵とか申す宗匠の建てたる席を、羨しく思ひて、その好みのかたに建てたしとて、注文せられしに、床板を松にして、節の七つあるをど好まれたり。いかなるわけにて、節數の七つある板をもとむるにかと、いぶかしさに問ひければ、師の建てたる席の床板に、節七つありけれど、それを擬するなりといへり。笑ふべきの甚しきにあらずや。師の造られしときは、定めて節なき板のなきまゝに、ふしある板にてせられしなるべし。さあれど、いかに師のあとを慕へばとて、わざ／＼疵あるものを求むるは、道を嗣ぐにはあらで、師の疵をあらはすと同じかるべしとれもへり。この道は、只きよらかにせよといふにはあらず。きたなからずありたしとするなり。道具とても、足らぬ所を、何かにて、その時の間に合するを、馳走とはするなるべし。すべて、面白きことは、足らぬ所にありて、足り過ぎたるに、雅なることなし。人には、みな、くせありて、さま／＼に好みを致せども、くせを捨てざれど、風流の道人にはあらず。理に入りて、理を遁れたる人ならねど、茶を好む人といふのみにて、茶道の人とは思はれ侍べらずなどいひて、立居ふるまひ、ま

ことに奥ゆかしく、この者を連れ行きて、家にて養ひおきたく思へり。
何か書かせて、都のつとにもせまほしと思ひ、乞ひけれど、無業たりとて、遂にかゝずなりぬ。予は、あまりの面白さに、紀念に、主が造れる卒都婆を、一本求むべしといへど、めでたからぬ物なり。やめ給へ。さわらで、かねて書ける物あり。是れを參らすべしとて、反古の中より、一ひら探り出でたるを、貰ひ來りぬ。その文に、
早く損ずれども、木にてする物を、土にて造り、土にてする物を、金にて拵へず。木でする物は、木にて造り、土にてする物は、土にて造るべし。金なるべきは、金にて造るべし。調度は、損ずるをいとひて、木土にて濟むべきを、金にてするは、よろしからず。秋篠奥平
とありたり。（柳澤淇園の雲萍雜誌）

七、鷹の虫

鷹の羽にすむ虫ありけり。空たかくとびかけるときは、はるかに人の住家などをも見くだしつ。げに、われは、事たれる身かな。つばさもうごかさで、千里の遠きに行きかよひ、雲ゐのよそまでもあがるめり。ことに、さまぐ\の鳥は、みな、おそれてにげはしる。げにも、われに勝つものは、大かたあらじなどおもひつゝ、かのたかの毛のうちに居つゝ、しきりにしむらをさし、血をすひてゐしが、そのやから、いとおほくなりもてゆきしにや、つひに、その鷹もたふれにけり。それより、みづから出でゝ、飛びかけらんとおもへども、飛び得ず。はしらんと思へども、すみやかならず。血もつき肉むらもかれぬれど、いまは、いのちつなぐやうもなし。から

じて、まづ、ろの毛のうちをくゞり出でゝ、はひゆけど、雀の子の居たりけり。われを恐れなんとみれど、雀の子は、知らぬさまなり。いかにして見つけざるかと、かたはらへはひよれど、うれしげに見て、くちどしさしいだして、ついばまんとす。例なきことなれど、おそろしくて、にげ隠れぬと、かの友どちに語りにけり。（松平樂翁の花月草紙）

八、心を用ふること

生れて、ものればゆるころより、老い行くまで、いさゝかも怠らずする事あらど、かならずいかなるわざにも秀でぬべしといへど、たゞに心もちなるにあらざれど、いくたびなすとても、得べしとは思はず。この飯くひ汁すふは、ものればへてより、日に三度はかくすることなければども、かくせんと思ふこゝろなければ、飯くふに上手もなく、かへりて、食ひこぼし、または、魚の骨たてしよなどいふもあるべし。されど、かくせんと思ふ志の一つなりといひき。（仝上）

九、こがねを好む

いやしきものなりけるが、平生くふべき米をも食はず、ひさぎてこがねにかへて、命にもかへじと、袋にいれて、持ち居たるに、秋の末つかた、俄に水出でにければ、かの袋を頸にかけて、高きところにゆかんとするに、はや、水かさ高くて、行くべきやうなければ、せんかたなく、木によぢのぼりてけるが、ことの外に飢餓にのぞみけり。さるに、米いささかつとにしれふて、水を泳ぐものをみて、かのふくろのこがねをみせて、これをみなまゐらせん。そのれふ所のよねを、いさゝかわけて給はれといへど、いとゐかりて、にくきそのこのいひざまかな。

かゝるとき、こがねもちて、何にかはせんといひすてゝ、およぎ行きしとなり。(仝上)

和歌教授法(つゞき)

獨　來　生

感懷歌

歌に、たゞに、事物の狀態をうつしたるにあらずして、自己の感懷をのべて、しかも、教訓歌にもあらず、詠史歌にもあらず、愛情歌にもあらざるあり。かくの如き歌は、みな、この中に入るゝなり。

言とはぬ木にはあれ共わがせこが
　手馴のみ琴つちに置かめやも

愛敬する人の琴をだに、地におかじ。捧持し居らんとの情、これ、禮の本なり。この心をもて、長者に對すべし。云々

古もかく聞きつゝやしぬびけん
　このふる河のきよき瀬の音を

ひとり、この河のみにあらじ。わが日本の名山、大河は、みな、われ等の祖先の、俯仰觀察して樂しみものなり。今日の不二は、赤人の見し不二なり。淸正の望みし不二なり。今日の櫻は、義家、高德の觀し櫻なり。吾人は、風色瀏麗の境に遇ふごとに、思を、とほく、いにしへに馳せて、種々の連想をなし來る時、愛國の念、油然として止めがたきにあらずや。云々

なみたかしいかに檝取みづどりの
　うきねやすべき猶や漕ぐべき

人生の大海に航せんとする時、これに似たることあるべし。人は、たゞ、義によりて決すべし。義、爲すべくは、波濤、山岳の如しとも、勇を

鼓して猛進し、死を見ること、歸するが如くせんのみ。義、已むべくは、岸によりて、水鳥の浮寝もなすべきなり。暴虎馮河は、古人のいましめなり。ゆゑに、事に臨みては、浮寝やすべきなはや漕ぐべきと、つねに、——義——といふ楫取に諮ひ詢るべし。云々

世の中をうしとやさしと思へども
飛立ちかねつ鳥にしあらねば

まことに、この歌の如し。いかに憂懼ありとも、羞恥のことありとも、人は、無心の鳥の如く、執着なく、翼ある鳥の如く、たはやすく、社會を離れ去ること能はず。されど、道を學び、性情を涵養し、逍遙として、世に遊ぶ工夫をなさんこと、肝要なり。云々

人生歌

人心の觀察、人事の批評、社會の狀態等に關する歌をこの中に收む。

富人のいへの子どもの着る身なみ
くだし捨つらんきぬ綿らはも

貧富の懸絕すれど、れなじく、天地間に、生を享けて、しかも、生活のさま、天淵の差別あり。されど、貧者は勤儉の心をはげまし、富者は、同情相憐の心をもて、自巳の奉養を節し、世の不幸を濟はざるべからず。しかるに、貧者の遊惰なるは、少けれども、富者に、仁愛なきは多し。いかに歎かはしからずや。云々

世をすてゝ山に入る人やまにても
なほ憂き時はいづち行くらん

これは、佛敎の旨義の歌なり。そもく、三界は、心ひとつなり。一念、迷ふるときは、脚下

に、地獄をあらはす。忽然として、一悟すれぞ、心境洞明、法性湛然として、苦樂兩忘の至樂地に出づ。外にむかひて、安心をもとむるは、河伯、水を求むるが如し。ゆゑに、苦をさけて、世を厭ふは、迷なり。――人間に住みしほどこそ淨土なれさとりて見れぞ方角もなし――といふ歌の如く、世をたのしむに至りてこそ、悟ともいふべけれ。これは、佛敎的の說き方なれぞ、れよそ、苦樂は、心のもち方によるものなり。いかにも、工夫をつけて、たのしく生活すべし。儒書には、仁者不憂。とあり。仁者となれぞ、山に入る必要なし。また、入るとても、なは憂しといふことなし。ゆゑに、中庸には、君子莫入而不自得。と說けり。この境界に入らずぞ、山にて憂き時、行くべき地なからん。云々

こもりくのはつせの山に照る月は
滿ち虧けしてを人のつねなき

榮枯盛衰は、常なし。盈滿に居て驕ることなかれ。月は、かくることあり。否塞に居て、落膽することなかれ。月は、みつることあり。云々

自然歌

自然の現象、風景、動植等、一切につきて詠せるものを、この中に攝す。この類の歌は、一種の比喩と見て、その意を說くべし。もし、比喩と見がたきものは、たゞに、その實景の美妙を想像せしめんみ。

富士の根をたかみかしこみ天雲も
いゆきはゞかり棚びくものを

論語にいはく、顏淵、喟然として、歎じていはく、これを仰げぞ、彌高く云々。道のいたるところは、高妙深遠なり。淺見薄識の、たやすく

窺ふべきところならんや。滿腔の心血を灑ぎて學ぶべし。道の高きは、あたかも、富士の如し。云々

大人、豪傑の偉業が、千秋に、巍々として、人間社會に聳ゆるも、聖賢の、崇嚴なる精神が、俗人の仰ぎ望むところとなるも、みな、不二の如しと觀ずべし。云々

野邊近く家居しせればうぐひすの
　　鳴くなる聲はあさな〳〵聞く

里仁爲レ美。ともいひて、居處によりて、道理をも、おのづから聞き、善に入ることを得。鶯の聲をきかんには、野邊に居るべし。道をきかんには、君子の門に遊ぶに如かじ。云々

やどりして春の山邊にねたる夜は
　　ゆめのうちにも花ぞちりける

花の散るを、夢に見ればとて、ふかき意味もなきが如し。しかれども、心が、花に專ならずば、かゝることもなからん。過去をわすれ、將來をわすれ、善をも思はず、惡をも思はず、無心、無念にして、花と對するとき、主觀、客觀、ふたつながら空し。いはゆる萬化と冥合し去りて、花の、我たるか、我の、花たるかを知らずなりて、不可言のたのしみあらん時、花のちる夢を見ば、果して、いかならん。散る花は、花ながら、さながら、わが散るやうに覺ゆべし。かく、夢の中にも、彼我の見なきとき、美といひ、善といふものゝ眞味も會得しつべし。何となれば、善、美、ともに、一面より見れば、同情にして、同情は、彼我の見なきを、趣とすればなり。云云

雨そゝぐ花たちばなにかぜ過ぎて
　　やまほとゝぎす雲に鳴くなり

この歌は、近頃の人の歌と記憶す。よき歌なるべし。たとへば、色の如し。幼兒は、ひとへに、赤きを、美しとおもひ、大人は、間色を、美しと見るなり。桃花のうるはしきは、三才の兒童も、これを知る。老梅蕾未レ破の風致は、兒童ならざるも會する人鮮し。歌によめることも、然なり。――住の江の松の葉ごとに見わたせば夕日をあらふ沖つ白浪――などいふ風景を、よしと思はん人も、この歌のいふところを、美しと感ずべしや、否や。

雨そゝぐといへど、音聲の感あり。沈靜の感あり、また潤澤の感あり。淸淨の感あり。花たちばなといへど、美麗の感あり、芳香の感あり。溫和優美の感あり。風過ぎてといへど、生動の感あり。瀟洒の感あり。これ等、すべて、眼前のありさまにして、愛すべく、親しむべき感あり。しかるに、下句に、山ほとゝぎす雲に鳴くなりに至りて、悠遠宏莊なり。かく、種々の感情を催起するもの、巧に配合せられて、おもしろきところに、生命あるものを入れ來りて、鳴くといふに至りて、靈活となる。云々（この說、或は、誇大に過ぎんか。）

見わたせば花も紅葉もなかりけり
　　うらのとまやの秋のゆふぐれ

理義のうちにありて、名利をもとむる、何の害かあらん。たゞ、これに狂奔して、中正を失ふが、人のつねなり。かやうの歌を誦吟して、心を澄すべし。云々

すみよしの松のゆふ風のどかにて
　　れまへの濱にたつぞねぶれる

この歌も、近頃の人のなり。さて、この世のある部分は、修羅道なり。されども、平和は、この天地を去らず。もし疑はゞ、この歌を見よ。

以上說くところの、例に用ゐたる歌どもは、思ひあたるまに〳〵、書きつけたれど、適當ならざるもあるべし。されども、歌の說き方に關する予の意見は、分明なるべし。ただし、字句、大意、れよび、修辭上のことを言はざりしが、實地には、これを說き、その他の說明も、みな、學ぶもの丶學才に應じて、それそれ、難易の斟酌あるべきは、勿論なり。なほ、こ丶に、三條の注意をか丶げて、この篇を完了せん。

一、　歌を說かんには、孔門の士が、詩を、道德的に說きし趣あるべし。

二、外形、言辭の妙を說くのみならで、內容、實質の批判あるべし。

三、連想を多からしむるほど、味あるものと知るべし

（完）

明治廿九年第八回文部省國語科檢定試驗問題（つゞき）答案試稿

師岡須賀子

第三　枕詞の性質を說き併せて之に關する參考書を列擧せよ

（答）　枕詞とは、言語をうるはしく云はんがために或る語の上に冠らしめたる詞をいふ大方は五言にかぎれり、されど、これを冠詞ともいへり。名詞、形容詞、動詞、副詞には枕詞の付くなり（わら金の土）（久方の天）（刈菰のみたれ）（みすずかる信濃）（ま木柱太き）（つがの木のいやつ

きつき）などなり。猶、（さゝ波や滋賀）（神風の伊勢）或は（空見つ大和の國）（春日のかすが）の如き、四音なるもあり。又、六音なるもあるなり。

參考書　冠辭考、秋の寢覺、枕詞假名遣文典、其の他、近時、文典、辭典等

第四　語學の發達を略叙せよ

（答）語學といふ名稱のことさらに付せられたるは近世の事なれども、助辭のれてりは、萬葉の時代よりなりとぞ。元祿年間、難波の僧契沖。和字正鑑抄をあらはしてより、荷田東滿の門、加茂眞淵に至りて漸く盛りに、本居宣長に及びて愈盛りに盛り行くさま、旭日の如し、斯くて、我が國言語を研究し發明せる學者、踵を接ぎて出で、王政維新以來益々其の光の輝くこと。至らぬ隈なき今日の有樣とはなれり。

第五　左の書は如何なる事柄を記せるものぞ

歷朝詔詞解　金槐和哥集　扶桑拾葉集　藩翰譜
和漢朗詠集

（答）歷朝詔詞解は、續日本紀以下の宣命を解釋せるものにて、本居宣長の著なり。全部六冊あり。金槐和哥集は、三卷なり。鎌倉右大臣實朝の家集なり。扶桑拾葉集は、水戸中納言光國の撰べる書なり。一部三十卷三十五冊あり。古今の和文の秀を拔きたるなり。扶桑拾葉集の名は後西院天皇の御賜と云ふ。藩翰譜は、新井君美の著なり。徳川幕府の命をうけて、一萬石以上の諸侯の事歷を錄せるなり。正編十卷附錄二卷目錄一卷、合せて十三卷あり。

和漢朗詠集は、四條大納言公任撰べりと云ひ傳

ふ。詩歌ともに調のめでたく、朗吟するに足るべきものを集めたり。二十巻あり、上下とし四時雑に分てり。

第六　左の人々の文學上の事蹟を問ふ

源隆國　一條兼良　北村季吟　貝原益軒
瀧澤馬琴

源隆國は宇治大納言物語(一名今昔物語、六十巻あり)に於て尤も有名なり。舊本今昔物語集、宇治拾遺集など、皆此の卿の著なり、宇治の山荘に世塵をさけて、世の中の見聞せることを記したるなり、平安朝の末葉の人なり

一條兼良は足利代時無二の文學家なり。其の著書いと多し、その重なるものをあぐれど、公事根元、江次第、花鳥餘情、歌林良材、連珠合璧、雲井の春、文明一統記等、なほ、あぐるにいとまなし、此の公あらざりせば、朝儀、神道、制度、法制を斯く今日に盛ならしめんこと難かるべし。思へど尤も敬重すべき人なりけり。

北村季吟は松永貞徳の門にて、徳川時代の中世の人なり。八代集抄、枕草紙春曙抄、源氏物語湖月抄、其の他五十余部の著、皆、後進を益するものなり。

貝原益軒は筑前の人なり。謙遜を以て己を持し、子弟を教訓する書、皆、國字を以てす、故に、諸制度、工藝百科のことまでも、尤も理會しやすく、其の進歩いちじるし、其の著書一百余種、みな今日に行はる、これも徳川中葉の人。

瀧澤馬琴は寛政文化文政の頃の人なり。小説稗史に於て其の名の膾炙せるのみならず、玄同放言、曲亭雑記の如き随筆類に至るまで著名なる

ものなり、本名、解、簑笠翁と稱し、著作堂と號す、其の曲亭とは、書齋に至る迂路より名づけたる戯名なりと、是の時代に於ては有數の學者たりしなり。

第七　長歌　短歌　旋頭哥　今様哥の形式をとふ

（答）長哥は五七言より始めて、終の二句を七言としたるものをいひ。短哥は長歌に對して云ふものにて、五七五七七の三十一字をいひ。旋頭哥は五七七五七七の句六より出できたるをいふ。今様は七五の句より成れるをいふなり。其の例はこゝにはぶく

第八　書牘文体は如何にして發達せしか

（答）もと、漢文の詔勅序表等の体の變化したるものにて、それに國文の語の混淆体の者入りて、書牘往來の如きものとなり。鎌倉時代より、足利、徳川時代に至りて愈盛りに行はれ、今日に至りたるなり。されは、元漢文の轉化せるものなれど、（不レ得レ止）（可レ被レ下）（難レ有）の如き轉倒文字の今に存せるなり。なほ、このことは、他日別に委しくいふことあるべきなり。（終）

例の筆のすさび、いと粗略なれど、これは何、かれはいづれの書より出でたるかなど、問ふものもあるを、言はさらんもいかゞなれど、其の責のかるゝかたはしにもとてなん、猶、歴史科も、教育科もと言はるゝをいかゝせん。

酔のすさび

奥山かの子

旅行ずきにてれはす、わか父君。一年、春の初めつ方、れもひ立ち給ふことれはして、鎮西の空に旅立

たせ給ひ、博多の浦より初めて、大宰府を過ぎ、名ある津々、故ある里々はいふも更なり、筑紫といふ、筑紫の里をもわけ／＼て。旅衣幾度かきかへては、木の葉と朽ちし、草枕いくたびか重ねては、浮寝をむすび、たちかへる春の花を、ふたゝび旅路の空にながめ、いつしか年もたけに鳧。夜な／＼わびあかし給ふ母君、日毎に待ち暮す妾の、家に在とも思ひ給はてや。二年といふ年の夕暮、丈のびてをり／＼れとなふ、すゝき千茅と諸共に、くちし軒端を、見まかふたがりの御面ざしして、歸り給ひしは、いにし秋の半なりけり。

なつかしの父上。こひしの父君。家につき給ひては、幸ある妾と、をさなき弟とは、日毎／＼に殘んの日影やゝ傾くと共に、盃片手に傾け給ふ父の笑顔まちとりて、こよひもとて、こよなき父君のありし旅路の物語、今はほと／＼忘れにたるも多けれど、尙おぼえたるもかつかつはあり。妾にうれしかるもの、必ずしも諸娘たちにもうれしく、妾におもしろかるもの、果して諸嬢等にもおもしろかるやは、うけていひかたけれど、父よりおぼえたる事は、みな、からよしと心得たる、妾がをさな心ろれのみなりとくみわけたまへ。

いで今宵は、少しく物おそろしくとも、まづまりてきけやとて、語りいづるは、例の父君の癖にておはせど、いつもさのみはおぢもおそれて、話中らに、ひたと父によりそふが常なりけり。

過ぎりしは秋の末つ方、昨日今日よりは十日もかりも後なりけむ。豐前國にて村里を放れたるある山つづき、日はやう／＼暮れかゝらむとして、友にまぎれたる村鳥二ッ三ッ、尙巢にも歸らで、頭の上にな

きさまよひ。ゆるぎも動かぬ風のひまに、無心に落つる楡の木の葉、心細からぬにはあらねど、宿らむには家もなく、尋ねむには人も見えず、休らへは休らふほど暗うなりゆく、爲すべうもなくて、只いろきに、いろくに、行手にあたりてまはらに見らるゝ老杉古松、その隙をもれて、ふたつ三ッの小黑き物影、心からにや、大入道などのうつくまれるに似たるに、あやぶみながら、近きてすかしみれど、何でとぞ、大入道と見しは、妖怪にもあらず、變化にもあらぬ、石塚の立てるなりけり。あやぶみたることには先子細はあらざりしも。子細なくて叶はぬこの石塚、さてもいかなる因緣ある塚なるべきぞ、そも何人の何したる所ならむ。丈より長き尾花の亂れ、風なきにうちそよめき、年經たる小塚大塚崔嵬として、今にもくずれかゝらむず、暗はやう〳〵におろひかゝりて、迷暗の淵はいよ〳〵深くなりゆく。あはれ、この故ありげなる塚、この塚は、罪あるものを捨てし跡ならずど、必無緣のものを葬りし所なるべし。さはれ、疑の雲拂はではとおもへど、いつまでたゞづめむとて、尋ねむに物のなく問はむに影もあらねど、せんすべもあらで、たゞ、おろひにおそふ暗夜を縫ひつゝ、又も行手をさして、おぼつかなくもたどりゆきぬ。

たどり〳〵に、たどりつきたるかなたの木陰に、明滅たる燈火の影、其をたよりに近づきてさしのぞけど、火爐に眠りたる一人のおうな、あやしげに見出して、左右なくぞこぞみていれず、この夜ふけになど、つぶやくに、さてはあやしきものとや見られけむなどおもへど、吾は決して怪しきものにあらず、道に行き暮らして、おもはずなる難義にあへる旅

人、飯をともねがはず、牀にとも乞はず、軒端なりとも、唯一夜の宿りを許させ給へと、過ぎこし道のやうを語りて切に乞へば、質實なるは田舍者のならひ、吾がいふ語に虛なきと、さも苦しげなる吾が身のさまとに心や解けたりけむ。さにてれはし丶か、さるにても、この夜もすがら、よくぞこ丶までは來給ひし、彼の松並木をも越ゑ、彼の古塚をも過ぎられし事、いかに心細くさびしかりつらむ、ひとり住居の便なさには、これまで、いくたりの旅人うたがはしとすれど、所から猶疑はる丶ことのれそましさ、さぞな饑ゑも疲れも爲し給ひつらむに、家といふは名ばかりにても、飯といふは腹をふくらすばかりにても、早く鞋とき給へと、れもふにましたるれうなのまめやかさ、うれしとやをらいざりあがりて、火爐の側によりそへど、ふすふれる榾拙の片に、きゑてはもゆるほのかげもうとましからず。腹たらひ座ゆるぎたれど、心にか丶る彼の塚原、先そのあるらむことのよしをさぐり問はむと、膝推向くれど、されどその塚原のことなるよ、旅人は、よくぞあのわたりを越ゑ給ひてこ丶までは來たまひし。いで物語らんに長くともき丶給ひね、かれには深き子細のあるにといひつ丶、頃は何時のこと丶は定かには得知らねど、近くも、二百年は經たらむかし、この里に一人の名主ありしと、名主といへど、その性くねくしく、下をしもともれもひたらぬが常なるに、この名主のみはさるくせくしきには似もやらで、家富み寳れはき上にいと情けくしくて、貧しきをあはれみ、饉ゑたるを賑は丶しなと、かりにも善根功德を積むことのみこの世のこと丶しければ、里人は、善き名主ぞと、慕ひなつかぬはなかり

けり、さりけるに、ある年の秋のことなりとか、さる方のたよりにて、驛馬の設けせよとのくだし文ありしに、をりしも家にあらざりしを以て、其の妻之を納めたり、妻は固と物をおろかにする癖ありて、さるまじきあやまち引出すが常にて、この度も、かのくだし文をば、しばしのまとてなほざりに、火鉢のひきだしにさしおきたるまゝ遂に忘れ果てたり神ならぬ身の、名主はさるあやまちのあるべしとは、そのをりまでも知らでありしに、御掟ぞといひつゝ、妻子諸共ひし／＼と、高手小手にいましめられたる時のおどろきいかばかりなりけむ。事をないがしろにしたる罪、眞妙にうけよとばかり、きびしく責めさいなまれたる末、おもてだにわなゝかる、礫といふ刑になされおきてられける。里人は固より、なさけしき名主となつき從へるものなるから

に、かくときゝて、いといたくうれひ迷ひて、いかでゆるさせてと、かにかくに、おほやけにこひのみしかど。この頃のならひ、一度かくとおきてたることは、いかにとも、いひもとかむよしのなくて、名主は、一家こぞりて、秋ふかき淺茅か原の露ときえて、殘れる塚の見らるゝごとくに、鬼さへすたきぬさまして、里人すら、七つさがりの頃よりは、物おそろしとて、足音をたち、草をしとねの旅人さへ、をさ／＼影をとゞめぬものを、知り給はぬとはいゝ、能くころ越ゑられ給ひたれ。さう／＼しき此の頃、物語るに身の毛立つを、旅人は猶誠の旅人にやとて、一部始終を語りつゞくるに、吾も初めて、さなりけるかと疑とけて、爐邊に臥しぬ。
父君は、かく語りつゞけて、いさゝけき事にてだに、かくばかり、おもきおきてを負はすること、時の宜

しきによるとはいへ、若し彼の時、名主の妻の心ききたる女にてあらましかば、斯かるあさましき事にはなりはてざらましを。世に千丈の堤も、堀り穿つ蟻の穴よりころとかいふなる。げに、おそるべきは、手をあげ、足を動かす一刹那、つゝしむべきは、事をなし物を行ふ束の間にあり、物事におろそかなるは、事におきてあやまちしいづるのみならず、遂には、家をも身をも、ほろぼすばかりの、おそろしき目にあふぞかし。狹くとも、一家の内の主人とあるべき人は、たとへば、男のおほやけに仕へまつりて、萬とり行ふと異ならじ、事につゝしみ物におそるゝは、女の身の最たしなむべき一つぞ。と語りをはり給ふ頃は、父の御面ざし、やゝ紅さし玉ひて、心地よげに見え給ふ。

歌人の奇行

佳山幾子

歌は、わが御國の手振にして、凡そこの御國に生れたる人は、誰にても詠み得べし、しかれども、歌には一種微妙の玄旨あり。若、切瑳琢磨して其の妙處にいたりなば、世に所謂

歌よみはへたてこそよけれ天地の
うごきだしてはたまるものかは

と、歎ぜしむるにいたらん

即ち上來の意を敷衍すれば、吾人の胸懷を言に顯はして詠吟するものにて、それには、自然、言語の長短緩急ありて、隨意に言葉を並ぶるものにあらずといへども、上つ代の歌は、文字の數も定まらず、事柄のながきは長く歌ひ、みじかきは短くうたひなどして、長歌短歌のほか、片歌とて、僅に五七七にて、

歌としうたふもありき、それより奈良天皇
平安天皇の　兩朝をへて、　室町天皇の時代にいたり、歌にはいろ〳〵の特色を生じ、近くは元祿の頃より天保年間にいたるまで、世の遷りゆくにつれ、和歌の體容種々に變り、言の葉に花はさけども、ろの歌の歌たる審美微妙の玄旨にいたりては千早振神代のむかしより、明治の御代にいたるまで、其の實のむすびかた、かならず同一なるべし、されど其の玄旨のしらべ、け高くしておのづから風致あり、その體容のたとへかたなき味をそなへてこそ、天地神明をも感せしむべく、人の憤怒をも和ぐべし、歌にしてこの玄旨なくむは、花にして實のひとつなき山吹のごとくならん。

いま、その歌人として有名なる先輩のいかに詠歌に苦心せられしか、いかに熱心せられしかをいはむに

むかし、能因法師嘗て

都をぞ霞とともにたちしかど
　あき風ぞふくしら河の關

と、詠じ自らも名吟なりとおもひしも、實事にあらずとて、世の人の譏らん事を口惜しさに、久しく閑居して毎日〳〵顔を日に晒し、やうやう顔の日にやけて、白河の關まで旅して歸りつるならんと思ふ頃ほひ、旅人の姿をよそほひて右の歌を人に示したりといふ。

また藤原の長能「三月盡」といふ題を「二十日あまり九日といふ日に春のくれぬると詠みて「春は三十日に限るものかは」と公任に難ぜられ、爲に懊惱して死せりと。

又、賴實は「木の實ふる宿はきゝわく事ぞなき」の一首に、五年の命を縮めたりといひ。

又道因は、歌道にいと執心なる人なりしが、死後已れの、歌の千載集に入れられれる爲、ある夜俊成卿の枕もとにたち、夢幻のあひたによろこびの禮をいひのべしと言ひ傳ふ。嗚呼おもへばその和歌の道に尽瘁せられし眞心の、いとゞおもひ出られて、誠に感心すへきいたりなり。古歌に、

おこたらず行かは千里のはても見ん
牛のあゆみのよしをそくとも

東京二十四景（三）

草の屋主人

飛鳥山

とぶ鳥の飛鳥山、げに、今日も、明日も、いつを云はず、時わかぬながめなりけり。九重の雲の宮居より、北ざまにあたりて、都の片隅に横ばりふせる丘陵にて、上野公園の裾なる停車場より、滊車をおつらへなど、またたぐひまに、麓に達すべく、歩行よりするも、上野、諏訪臺、日暮里、道灌山を越えゆかむ、路はさむかりむづかしくもあらず、殊には、皆、すぐるは都の名所にて、四方のながめ、途次の道草に、疲れは覺ねぬ程のすさびならむ。王子の稲荷八幡、ま近の社なり、紅葉の瀧の川も程遠からず、たよりに、詣でも訪ひもせむ、まことの餘興にころあらめ。

山の眺めは、四時をとはねど、山ながら咲きにはふ櫻の春こそ、限りも知らぬ美はしきながめならめ。さては、葉櫻より何時か茂りゆく夏木立の蔭に、ふもとの小田にそよぐ稲の青葉をうちわたし眺めなどいつか立ち去りがたき心地すめり。唐紅にはあらねど、薄く濃くいろ〳〵に色づく秋の山邊は、誰が

目にもきて見まほしき錦ならむ。冬の雪、それも寒さを厭はずは、こよなく心しづけきけしきにてそあらめ。

西には高く富士の峯をも仰ぐべく、東には遠く築波の山をも望むべく、空清う晴れわたれるあした、山邊にたゝずみて見わたさむ、げに、大やかにいはゞ、吾妻わたりを、一目にお



つめたらむ心地もすべし。かきつくれど、山ながら時なから面白きながめにこそ。たゞこゝかしこに近く不作法に登りたる煙筒より、むら〳〵と吐き出る烟のみは、あらずもあらまほしといはむか。

落花（八）

柴田千稻

第九　御暇申上げん

夜の雨は晴れ渡れり。武藏野の露を分けて旭の光はうら〳〵かに立昇りぬ、見渡せど此處の森彼處の林に立連りたる數十流の旗は朝風に靡き、小高き丘の上生ひ繁りたる草葉の中に立並びたる人馬の聲々、今や此茫々として青氈を延べたるが如き原は、血漂ひ屍飛ぶ修羅の巷とならんとす。

暫くありて飂々たる風は碓氷嶺より吹き起りて、木梢は騒ぎ草葉は波を織る折しも、太鼓の音は鞺々として天地に響き渡れり。一時に呼はる人の聲は起りぬ。旗は縱横に行違ひぬ。矢は飛びぬ。刄は閃きぬ。合しては離れ。離れては又合し。エイ〳〵聲を上げて打ち合ひ揉み合ひ、何れも此處を先途と戰へり。かく戰ふ事朝より晝に至れども、勝敗は尙決せざるが如し、折しも片への丘此方の森より、俄に撻とあげたる聲と共に、中黑の旗印サッと押立たる一軍。れめき叫びて敵中に驀地に走り入りぬ。アハヤと見る内に兩軍入り亂れ、奮撃突戰何れが何れとも別ち難かり。

かく不意に後より横斷せられたる足利勢は、暫くにして見苦しくも浮足立てゝ崩れはじめ、將士の叱咤するをも顧みず、蜘蛛の子を散らすが如くに、四方に遁げ散れり。二引兩の旗印は此處彼處にすてられ

て涅に塗れ、哀れに敗軍の表として殘りぬ。

○　○　○　○　○　○　○　○

蕭々として生繁りたる森の下に息を休むる將卒數騎あり。中に龍頭の甲を蒙りて、錦の直垂を着し、金物打ちたる太刀を横へたるは大將ならん。遙に遠く聞ゆる鬨の聲に耳をそばだてゝ馬に秣飼はする時、後に從ひたる荒無者進み出でて、思はぬ敵の伏兵に敗を取りしも、勝敗は天なれば御心安く思し候へ。いざ敵の寄せ來ぬ間に、鎌倉へ落ちさせ給ひ、再び軍を寄せ集めて、小賢しき新田の小冠者を取挫ぎ給ふこそ然るべけれ。さらばと計り立ち上る折しも、何處よりか風を切つて飛び來る征矢一條、大將の鎧を掠めて後に立ちたる荒武者の咽元にグサと立ちぬ。すはや敵なりと均しく立ち上りたる武士共、不意の狙撃に膽を冷し、手早く大將を後に圍ひて、屹と四邊を睨まへたる眞直中へ、太刀を揮つて疾風の如く飛び入る女武者あり。丈にも餘る緑の黒髮を振り亂して、紫裾濃の鎧を着流し、堀口三郎親家の妻皐月と名乘りて、大將目掛け打ちてかゝり、先に立ちたる武士二人の細首を物の見事に丁と斬り放ちぬ。

○　○　○　○　○　○　○

中黒の紋打ちたる幕を引廻して、篝火晝の如く燒きたる中に、今日の功名を誇りて騒ぎ罵るは、新田の本陣にぞある。其の奥の障几によりて悄然として兩眼をしばたゝくは、振はざる南朝を回復して父の怨を晴らさんとする新田義興なり。其前に、鮮血淋漓として鎧を通して滴るをも顧みず、頭を垂れて涙にくるゝは先きの女武者なり。彼は聲を曇らして、夫親家が病の爲め起つこと能はざるを悲しみて、遂に

腹掻切りし事を詳かに述べ、暫くは言葉なくして降ち來る涙を鎧の袖に揮ひぬ。漸くに顔を擡げて、申すも恐こき限りに候へど、我君のかく雄々しき御出立を、夫親家に見せ申さむ如何に喜び申さまし、怨を抱いて死なんとせし折にも、太鼓の音鐘の聲に耳ひきたて丶、無念に堪へざる血相を、傍に見る妾の身の悲しさ口惜しさ、如何にもして此無念を晴させてん此怨を報いてんものと、覺束なしとは思ひ候ひながら、一念は巖をも透すとこそ申し候へど、片身に遺し丶此鎧、沸き返る血汐を塗りし此刄もて、せめては、敵の者の一人二人切倒し、我君に對しまつりては夫の志を果さしめ、敵の者に向ひては怨を報い、抱いて死にし無念さを晴らさせ申して、妾が身も直ちに其跡追ひ申さんと、漸々來かゝる道すがら、敵の大將の落行くに逢ひ申せしかど、勇み喜びて、こも夫の我志を憐みての御引合せと、兼ねて夫の愛せし重藤の弓執りてきつて放ち候へど、悲しや腕震ひて、矢はあらぬ所にそれて、只葉武者二人三人斬つて落しゝのみに候ふ。思ひし敵は取にがし申しし口惜しさ、こも女の身の云ひ甲斐なき故と思ひ定め候ひしものゝ、若しかゝる時夫のいまさむと、事に觸れ折につけて心に離れ難きは夫の自害、アハレ只願ひまつるは夫の忠義の志を憐と思召じ、不愍の臣と仰せたまはらむ、いかむかり地下に忝く喜び候はん。又二つには我君の御武運常に榮えまして、賊臣共を苅り拂ひ、もとの大御代にかへし給はゞ、夫の志も空しう候はず、嗚呼がましき限りに候へども、夫婦の魂は草葉の陰にて何時の世までも御護り申上げんと、次第々々に細り行く枯野の虫の聲、胸に迫り來る息をはつと吹き出し、最早

やゝこれにて申上ぐる事も候はず、さ、さらむ御暇申上げんと、義興を打仰ぎたるまゝ、漸々變り行く顔の色、やがて、夫が腹貫きし刄を抱きて前に伏し倒れぬ、義興は顔をそむけて流るゝ涙を留めあへず、居並びたる将士は鎧の袖に顔を押當てゝ、一人も言を發する者なし。月は雲に隠れて風寒し。

此忠烈なる夫婦の屍は、将士の清き涙に送られて、廣き武藏野の苔の下に眠りぬ、僅に建てたりし墓表も、幾百年の風雨にさらされ青苔に蝕せられて、跡訪ひて昔を忍ぶ者も絶えにたり、今は誰が畠に鋤き返されけん。あはれ。

(終)

朴平

白魚女史

時は彌生、志かも中旬。山邊の霞、色ふかく、野邊の春日、光り豊に、花は袖を連らねて春風に舞ひ、柳は糸を垂れて春情を繰る。一年けふ醉はずんぞ、秋月は悲愴多し。雪裡は清寥のみ。人は心も空に、山野にあこがれ、世は魂も亂れて、春風に狂ふ。彼れも醉へり。此れも狂へり。さるを、さても、おなじ世に、又、變りはてたる男なりけり、伊能知文雄。書物の中に埋れての讀書三昧、此の男、ものゝ本の懐に入るとみて、母君の孕まられしとはきかねど、生れながら書籍を好む僻は、六歳の春、大學は

孔子の遺書とき丶初めし頃よりあはれ、竹馬のすさびも知らず、獨樂うつすべも知らず、唯朝な夕なに書をときては、机を離れず、冬の雪、夏の螢、唯書よむ友と思ひて外を尋ねず、春の夜のおぼろ、秋の月のあはれ、もの丶本にて其の影をきくのみ、誠を知らず。かゝりけれど、何時しかと頭の惱みをおぼえはじめ、身うちいやましにすぐれず、父は昔に去りて、母一人り、斯くてはと諫めんとすれば、是れなくては命もほしからじとむづかるに、詮方なく、三歳のとき、母の臨終にも、是れにのみ心遣しぬ。大學も終り、文學士の位置、此の人のみはふさはしといはれぬ。されど、けふ此の頃、野山をうちなびかす春風も、此の人をえ動す能はず、百花の美しきも、草紙ほどの價を覺えず、おのが蓮の臺ともおもふ書齋に、唐の書、やまとの卷、西洋の本のうづたかき中に埋れて、何やらむ讀み居たるが、眼鏡をはづして沈思し、軈て微笑みて、また餘念なげに讀み出づるとすれど、苦しげに咳こみ、胸を押へながら、側の瓶、藥ならむ、うちすゝりて、又眼は本の上をさらず。形は在りて、空しき殼に似たれど、前の程より僕にやあらむ、老人の入り來りしも心づかず。幾度か呼びかけられ、振りむきもせず、朴平か何ぞ用事か。

質朴もその名にあらはれたる朴平、むかし氣質は結髮のむすびにも見ゆる男、何の憂

ふることとかある。悄然として、物あんじ貌に打ち長視めて答なし。文雄は、もどかしげに、朴平、何の用ぞ、早くいへ、時が費ゆるぞと、初めて振りむきて、問ひかくれど、老人は涙眼をしばたゝき、あはれ若殿、朴平が老後の願望、きかせ置き給らぬ、世を限りの面目と、かしこまりきてゆれど、あなめづらしや、朴平。遂に願はざるそちが願ひ、きくもきかぬも問ふべききはかは。はやく告げね。老いてのかしづき、朝夕はいかばかりか苦しからん。若き者のよきあらば、そちが苦しみを輕うせむとは、せくより思ひつゝ、いはですぎにし心づきなさよと、やさしげなる言の葉。さらでもくづれやすき老眼、えこらへずなりてか、はら／＼と膝をたゝく涙の雨。あなもつたいなや、いかでさる事を。先殿よりの御志、忘れかねたる此の年月、二代の忠僕朴平といはれむ願ひの外には、たへて願ひなき身の、なか／＼に、朝夕のわざ、身にこたへたるほどの事なきが遺感に思はれ侍るばかりに候て、何の骨身の苦しき事の候はん。唯かなしきはといひて、瀧なす涙せきもあへず。文雄は、せんすべなげにうちながめて、そちがせんわざ、いはん事、われはえこばまじ。なれが思ひにまかせてん。心のまゝになすべけれ。願ひなど、さる事せであれ。はや／＼と云ひて、又おしなほりて、机に向はんずるを、翁は、あな面目あるれん言の葉、冥加につきて願き奉るは、あはれ

若殿、けふ一日御寵愛のれん書どもにれん暇こそ下させられ給はんことこそ、願はしう候なれ。

文雄は何思ふらむ。俄に形をあらためて、朴平、われは書をはなれては、片時も居らぬといふことは、そちもかねてより知りつらむ。そちの心なれど、そちの願ひなれど、そはきかれじ、きくべくもあらじ。われは書なくては、この身ありとも覺えざるなり。益なき事思ひなせそと云ひすて丶、いと不興氣なれど、翁も、今はかくてのみ、いひやむべくもあらず。げに翁が老朽の願ひ、御不興にか丶らむとは、兼てより去か思ひも、はた好ましからずも候へど、わが君の讀書三昧、上もなくめでたき御振舞ひながら、餘りに御心のみ深く候て、御身の上を露ればしめし玉はねど、かくては遂にみ命もいかならむと思ふ心のわびしさに、書ならで世のつねの折りふしのれんすさび、たまさかは、事もなきれん慰もあらせられ、御命をも露ばかりはればしめしかけられん事の願はしう侍ればこそ、かくは申しあげ奉るなれ。樸平が老後をあはれとればしめさは、けふ一日ばかりも、すゞろなるれんすさび、朴平が心に叶はせられ候はゞ、萬年の冥加に候。文雄は益々不興氣に、聲さへや丶いらだちて、朴平、われも人ぞ。情もあれど、さばかりの智識も持ちたり。いかで、わが身のほど、命のほど知らずや


松亭



は。知れむてこそ、かくは讀書に窮々するなれ。のう朴平、人の命はいかはかりと思ひてか。百歳といふは、世にめづらしくはあらずや。大概は、朝の露、夕べの煙り、夢とも現ともわかねむかりぞ。げに短き命なるからに、思ふこと何にまれ、世の中にして成し遂げむことはいとかたし。なまじなる心にて、朝に夢み、夕べに狂ひたるにては、何の成る事あるべき。命長うしたりとて、百歳を出でず。百歳いきたりとて、半をあだしすさびに過ぎなば、五十歳の壽にすぎず。ましてや、徒に朝に夕を過ごしては、百歳生きたりとて、一年の業も成る事あらじ。のう朴平、そちも知るごとく、われは稚きよりかくあれども、なほ書は讀まぬが多く、文はすぐれたるは無く、覺りは得たるものあらず、世の中にわれある目的だに、さかとは定まらぬにあらずや。朴平、もはやいふ事はなからむ。いかにや。

いかで若殿、れん身がの給ふ事、ことわりに似て、なかなかに、ことわりならじ。若殿は極端にのみ馳せ給ふからに、さかいはれむ。百歳を百歳ながらに夢みなむ、現の世に爲す業は、一時もあらずもあれ。さかはあれ、百歳が命の中に、十歳廿歳をあだにすごさんことあるとも、なほ八十歳あまる百歳に近き年月あらむ。二十歳三十路窮々として果つるにはまさりてならむ。朴平が申すは、此の處にて候。若殿は人世の短き

を知りたまふも、こを處する長短を知ろしめし給はぬところ思はれ候と、一鐵の直言。文雄はゐこらへず、朴平、何と申す。いま一言申して見よと、いきまきて見れど、朴平は木石の動かぬ赤心、若とのは學問をのみ思ひあまり給ひて、何事も學問をさきとして、學問を本として、人世をとき給へばこそ、み命といふものは、さながら末のでとく思召され候へど、れのれは學問といふ門にも入らず、空想とやら理想とやらいふはてにも入らず。されど、又、なか／＼にかたよる方もなく、ゆき迷ふはてもなければど、本末も思ひの外に候。人といふものなくど、學といふものあらずとき丶もあへず、文雄は眞白の顏色に、さつと朱をそ丶ぎしが、はては青く身をふるはして、朴平、われは最早や十歳昔の文雄にはあらぬぞ。さる本末を過るものかは、要なき事ないひろ、ともあれ、朴平、われは書よむ業は、こよなき慰みぞ。上もなきすさびぞ。書よむは樂の限りなれど、わがあけくれは樂しみあかし、慰み暮すなり、何にしに、これ故に苦しかるべき。無益のことなす丶めそと制すれど、朴平今はいつかな退かず。よしやれん慰みにあれどとて、れんすさびなれどとて、さどかりればれさせ給ひては、淫に候。れん身をろこなはせられんものをと。げにいひたりや、いひたり、朴平の不忌。はざしたり。朴平、われを若きものと思ひ侮りてかと、まなじりもたつと見ゆる文雄

が氣色、朴平はまたはら〳〵と涙と共にひれふして、おなもつたいなや、何しに侮りなど申し奉ることかは。先殿が御臨終、上樣のれんはての日も、此の朴平に呉々の御たのみは、唯和子さまの御身の上、み命に障らぬやう、折りふしの心つけ、かへす〴〵も頼みきこえ給ひたる、さなくとも骨身にてたへたる御恩、かへさんは、げにわ子さまにのみと、至らぬ身が必至の覺期、おん身の上をれもふより外は餘念もはべらず。いかで侮りなん、くやしき言なのたまひそ。身をすつるよりのうらみぞと、かこちつゝ、泣きつ、なほ是非にとすがるを、文雄はよみながら、けいさんもて、側の花瓶、したたかにうちやぶり、朴平、そちが願ひ、此の瓶、もとにかへらむ、きかむ。よしなけれむ、きかれじといきまくに、いまは云ひかへすべきたよりも無くて、朴平は、せんすべしらにうちながめしが、何思ひけん、つと思ひありげに、立ち去りたり。





螢　近衛忠煕

もえ渡る思ひはそれと見えながら
涼しきかげはほたるなりけり

晴後遠望　東久世通禧

隅田川かはかみとほくあめはれて
みえこそわたれをつくばの山

竹風　毛利元德

ふる雨の音かときけばしげりあふ
窓のたかむらかぜそよぐなり

夕水鷄　鍋島直大

雨はれて夕つきうつるさとかはの
ほそきながれにくひなゝく也

燭影映水　高崎正風

いろくづのひれふる度にゆらく哉
池にうつろふともし火のかげ

山家夏　前田利嗣

夏のきてふちつゝしさく山さとに
ほとゝぎすさへ鳴わたるかな

海邊煙　長谷信成

舟よするうらのみなとゝ賑はひも
よそにしられて立けぶりかな

旅梅雨　西三條實義

さしてゆくそらはれやらぬ梅雨に
たどるたどるも越るやまみち

人傳郭公　諏訪忠元

ほとゝぎす絶てきなかぬこの頃は
人づてだにもうれしかりけり

山新樹　仝

ふたつみつ花を殘してあしびきの
山のさくらはわか葉しけれり

詠史　宮地嚴夫

今川をせきとめしこそあだなみを
きみがしづめし始めなりけれ

徑夏草　阪正臣

風のゆくみちのみ見ねて夏ぐさに
わけ入かたくなれる野邊かな

扇　三浦千春

すゝしさにれきてきにける扇こそ
なつを忘れし志るしなりけれ

和琴　仝

いまも世にあづま遊びの殘らずぞ
むかしのことを何に志のぞむ

あふひ　師岡正胤

ときめきし昔志のびてれかしきは
かれたる小簾のあふひなり鳬

垣卯花　仝

これもまた空にしられぬ雪にして
色さむからぬかきの卯のはな

陸奥國にいみじき高潮上りて人あまたそこなはれけるよし聞ねて皆人歎きあへる頃　柴田部榮

みちのくによせしあだ浪よの中の
いくその人のそでぬらすらん

紫式部　三輪義方

わけざりし月の影こそゆかしけれ
　まきの板どをたたくくひなに

夏風　林　甕臣

わたゝかに吹くものとしも思ひ鳧
　南ある〻日ぞなつはすゞしき

夕立　仝

舟人はとまふきまどひさわくなり
　くもかせはやし利根の川づら

丹波の孝女　佐々豊水

白波のよるとも志らでねぎかけし
　神やうけゝんあはれ眞ごころ

瀧　安齋篤敬

白瀧のかゝるを見れぞれのづから
　こゝろすゞしき夏にこそあれ

扇　仝

秋風のよしかよふともあさゆふに
　なれしあふぎの妻なわすれそ

養老瀧　石原均

くりかへしくり返しても結むなん
　老をやしなふたきのしらいと

海路名所　仝

淡路島手にとるぞかり見ゆるかな
　浪花津かけてかよふふなぢに

琴　木庭芳香

松の風しみづのれともかよひきて
　手ならす琴のねもしろきかな

天香山　仝

君か代の古きためしに引きてまし
　神やつくれるあまのかぐやま

須磨浦　松本操

花盛りちりしあを葉のかげとへむ
むかしにひゞく須磨の浦なみ

旅行友　仝

おもふどち海山かけてたびごろも
月をかたしく夜半のたのしさ

白河樂翁公の傳をよみて　菊池興澄

白河のきよきながれを世をわたる
人みなにしもくませてしがな

夏露　近衛貞子

夏くさの茂るまゝなるわがやどは
ひかげにきえぬ露もありけり

谷新樹　前田朗子

谷がはをながるゝ水も見えぬまで
わか葉をぐらく茂りあひに鳬

田上螢　柳原愛子

風わたる小田の早苗のはずゑより
つゆもこぼれてとぶほたる哉

初梅雨　小池道子

はじめだにいぶせきものを梅雨は
いつの日までか降つゞくらん

樹陰水　松平健子

くすの木の年をふる木の陰にわく
淸みづいよいよあたらしき哉

海邊郭公　北島以登子

もしほやくけぶりの上を横ぎりて
うらなみとほく行ほとゝぎす

庭卯花　保科節子

消やらぬ雪と見るまでにはの面の
かきねのうつぎ花さきにけり

待郭公　三島竹子

吾のみと思ひしものをほとゝぎす
初音きゝしといふひともなし

山郭公　鶴久子

足びきのやまの奥までたづねても
ふた聲なかぬほとゝぎすかな

夕顔　小川直子

われはてし伏屋の軒もゆふがほの
花にれもてをれこしけるかな

夏の夜すみだ河にあそびて　海上壽子

舟うけて水の上ゆけをなつごろも
そでふきかへす夜風すゞしも



硯　内田遊歌子

なれて見る硯の海のいそにこそ
まつ筆ぐさも生ひぬべきかな

臣といふことを詠る歌　海上壽子

あきつ島、やまとの國は、玉ぼこの、道ある國ぞ、此の國を、守れる臣は、刺竹の、君にめでられ、千萬の、民にあふがれ、幸弓の、幸ぞればかる、しかれかも、君をうやまひ、かゝれかも、民をあはれみ、まつりごと、ことゝりまして、朝宵に、身もたるしらず、つかへまつれる。



●東宮殿下晃山行啓　皇太子殿下には、御避暑の爲、明二十一日午前八時二十分御出門、仝九時上野發汽車にて、栃木縣下日光御用邸へ行啓あらせられ、當分仝所御滯留の旨去る十六日仰出されしが、當日同縣小山停車場にては奉迎の爲、大綠門を作り、烟火を打揚んとすといふ。

●華族女學校卒業式　去十八日午前、同校階上に於て、卒業證書授與式を舉行せり。皇后陛下には、午前九時御出門、同三十分御臨校遊ざさる。同校諸職員生徒一同門内に奉迎し、暫時御休憩の際、細川校長には第十一學年生徒成績表を奉呈せり。午前十時に至り、生徒參觀人來賓等式場に着席し、次で皇后陛下式場に臨御あらせらる。此時奏樂あり、次に生徒一同　皇后陛下御製の金剛石、水は器を歌ひ終て、細川校長全科卒業生八名に證書を授與し、次に同校長の式辭、次に全科卒業生徒總代星野ツネ子の謝辭あり。次に生徒等の箏、洋琴唱歌等あり、終りて　陛下には、御休憩所に入御あらせらる。此間絕ず奏樂あり。之れにて式全く了り、陛下には還御遊ざされ、諸職員生徒門内に奉送し、別室にて立食の饗應ありたり。今回の全科卒業生は

星野つね子　辻村たへ子　井上若葉子
古莊　清子　相良　貞子　三島　鶴子
土方　玉子　森　乙女子

にして別科卒業生は田島秀子秋月順子なりと。

當日細川校長の式辭は

卒業生諸子に告ぐ諸氏は幼稚の時より父母の膝下に養はれ家庭の教育を受けたり其學齢に達するに至り本校に入りて學校教育を受け積むに歳月を以てし成規の課程を修へ今日卒業證書を領收せらるるの榮を荷へり然りと雖も教育の事たる未だ之を以て足れりとすべからず今より以後は所謂自己教育と曰へる者に從事せざるべからず諸子は家庭の教育を受け又學校の教育を受けて身を立つるの準則となる者を始め世務に處するに相當なる知識を有さるゝを以て此よりは他人の力を借らず自己の能力を發達せしむることを務むべし是所謂自己教育にして即ち實地の教育には三種の大なる利益あり能く自信することと其一なり能く判斷することと其二なり能く忍耐することと其三なり學校教育の利益大ならざるに非ずと雖も自然理論に傾き易き者にして應用の際或は迂濶なるを免かれ難し故に實地の經驗を積で其缺典を補足せざるべからず此自己教育は家庭教育と學校教育と相並び人生教育の三大段階をなす者なり諸氏は已に家庭と學校との二段階を經たり宜く最終の段階たる自己教育を受け以て卒業生たるの資格をして完全ならしめざるべからず諸子夫れ之を忽にすること勿れ

明治二十九年七月十八日

華族女學校長　細川潤次郎

●小松宮殿下御一行の逸話　日本赤十字社支部總會に御臨場の爲め、このほど長野縣地方を御旅行あらせられし、小松總裁宮殿下御一行の信州上田を御通過の際、御休憩所に御休息あらせられしに、御許可を得て、小縣郡青木村島形萬平なる者明治廿五年中獲たる赤鰤二尾を御覽に供せり、殿下にはさても珍奇なるものかなとの仰ありて、献上の儀早速御

聽許あらせられたれど、高崎長野縣知事は取敢へず、一首の歌を詠みて奉れり。

心なきうろくずまても祝ふかな
赤きすかたを君にさゝけて

御供にありける高崎別當正風男爵戯れに口すさみて、

わかどぢやうぶつちかへれど赤十字

殿下保福寺峠を御歩行あらせらるゝに、坂路泥濘にして御脛を没するばかりなり。豫て健脚をもて誇れる高崎知事過つて轉倒したりけれど、別當乃ち狂歌二首を詠ず。

保福寺峠の坂中知事のすべり玉へるを見て京童のうたへる、

健足をほこりし知事のころべるは
みこなくさむる餘興なるらん

知事轉倒の際振返りけれど、

又

笑ふ人ありもやするとさみたれの
ふりかへりしも知事の愛嬌

知事は直ちに返歌せり

時としてむかでもころぶものなれど
健足とてもあやまちはあり

高崎別當体肥滿にして歩行に困しむ。剰さへ非常なる泥路なれど、保護者の肩に寄りて纔に殿下の後に從ふを得たり、殿下振回り給ひて、其有樣を御覽ありて戯れて宣まふ樣、高崎の狀は宛から朝鮮の大臣の如しと、隨行者中其譬喩を知らざるもの多し、花房氏永く朝鮮にありて其事情に明らかなれど、之れが説明を爲して曰く、朝鮮の大臣は籠を下れど從者の肩に助けられて歩行するを常とす、と殿下の博聞

に渡らせらるゝ大概かくの如し。

●宮中御歌會　去る五日宮中にて執行せられたる御兼題の歌は

齋宮女御

琴のねに通ひし松の風よりも　　高崎　正風
　萩の音こそ身にもしみけれ

松風の通ひし琴のしらべより　　梅溪　通治
　いつきの宮の名こそ高けれ

かけ高き雲井の月のいかなれど　　税所　敦子
　秋のみ山の外にすみけん

琴のねに通ふしらべをのゝ宮の　　小池　道子
　松にのこして秋風ぞふく

松風の吹きかよひたるつま琴の　　北島以登子
　高き調べのなつかしき哉

言の葉の高き調へはよゝをへて　　黒川　眞頼
　今も聞こゆる峰のまつ風

松風のよにさわがるゝ事ぞなき　　坂　正臣
　秋のみ山は思ひかけぬを

琴のねに峰の松風かよひ來て　　六條　有義
　いつきの宮の昔もはゆ

浮雲は秋のみやまをへだつれど　　小出　粲
　高くもひゞく峰の松風

のぼるべき秋のみ山をよそにして　　植松　有經
　さか野の宮に住める月哉

萩のはの音もかよへる琴のねを　　大口　鯛二
　松風のみと思ひける哉

身にしみて嬉しき程を萩のはの　　鎌田　正夫
　音に寄せても聞えわけゝん

時しもあれ忍び兼てや秋の田の　　遠山　英一
　稲葉のそよと音にたてけん

妻琴のねよりも高しすゝか河　　鶴　久子
　再びこゑしなみならぬ名は

●文部省令　女子教員補充の爲め文部省令第八號を以て、女子高等師範學校規程八條の次に、左の一條を追加せられたり。

第九條、尋常師範學校女子部高等女學校教員の缺乏を充たす爲めに特別の必要ある場合に於ては專修科を置くことを得。

●共立女子職業學校　女子職業の日に隆盛に赴くは、最も喜ばしき事なり。神田一ッ橋外なる、共立女子職業學校にては、設立以來漸次繁盛に赴き、現今にては、生徒五百余名に達し、校舍狭隘にて寄宿舍を以て敎塲に充て居る有樣なるより、近々校則を擴張し、近傍の家屋を借入、敎室に充る筈なりといふ。

●鹿兒島縣尋常師範學校にての松方伯の演説

今日は本校の各敎塲等を參觀致しました處が、敎員の衆より話をする樣にとの望みもありましたから、一言感じた事を申しませう。

諸子折角御勉强と見ゑて、結構なことぢや。此の師範學校に在學の人々は、他日成業の後は敎員と爲る目的であらふ。人の師となり人の模範と爲りて子弟を敎育しやうと云ふことは。誠に重大なる責任である。先づ己を修めねば。人を諭すと云ふ事は出來ぬと思ふ。故に諸子は先づ我身を修めて言行を愼み、子弟の模範となるやうに御心掛ならねばならぬ。

女子の御方は殊に行儀行跡を愼み女らしいと、言れる樣にありたい。他日學校敎員となりて、子弟を敎育するにしても、又良妻賢母となりて、一家を修むるにしても、女らしいと云ふ德を備へねばならぬ、家庭と云ふものは、大事なるものぞ、其結果は萬事に及ぶからして、兒女の敎育は家庭の訓か大に素を爲すものぢや。如何に學校敎育に力を盡しても、家庭敎育が悪ければ、一日之を煖めて、十日之を冷すと云ふことになり、誠に敎育の甲斐がない。女子部の御方は、一度は人の師となり、遂に良妻賢母となるべき人であるから、今日

より婦徳を養ふて、立派の家庭を作るやうになされたい、今から申して置くも早計に似て早計ではあるまい。

此は一般の生徒に申すが、兎角鹿兒島人は數理思想に乏しい、今日も高等小學校で御話をしたが、元來鹿兒島は尚武の方に傾きて、農工商の如きは賤んで居つたものぢや、其で算數の如きも自然重きを置かん、粗末のことの樣に思ふた處から、不得手になつたけれども、今日は農工商は尤も大事な業務で、國家の盛衰にも關係する。隨ふて算數の必要は申すまでもない、獨り農工商ばかりでなく、軍人になるにも、政治家になるにも、數學は必要である。故に諸子此に注意して御勉強なさらねばならぬ。又附屬の生徒は能く〳〵學校の規則を守り、敎師の敎に從ひ、正直に勉强せねばなりませんぞ。途中で喧嘩をしたり、口論をしたり、行儀が惡くては諸子の爲に宜しくない。此學校ではあるまいと思ふが、世間には敎員の事を惡く評判して、彼是宜しからぬ相談等をして騷動することもあるやうに聞く、是は學問修業の爲に極めて不都合ぢや、左樣な弊害などに陷らぬやうに、折角行儀を愼みて、敎師の敎に從ひ、着實に勉强さならんければなりません。

●甫守校長の談話(つゞき)

一、諸君に於て自然れ序もあらば、可成時々本校に立寄られ、授業の有樣を一覽せられたし、然るときは本校職員は一層親密に本校の目的、一方より申せば生徒各自の目的を達する方法等につき協議の便宜を得て、大に仕合とする所なるのみならず、生徒授業の奬勵となり、修業上雙方に於て莫大の利益ある

べしと信ずるなり。

一、本校は、本校の卒業生とは新舊に拘らず、極めて親密なる交際をなすのみならず、卒業生の組織せる同窓會等には最力を盡して保護監督するの方針を執れり、又卒業生を時々本校に召集して、修身上の訓誡をなし、併せて時勢に後れざるやう、日進の智識を與ふるを主とせり、故に卒業生の會合日には、家庭に於ても家事を繰合せの上出席の便宜を與へられたし。

一、諸君にして若し本校の事或は生徒の事に關し、世間の風評を耳にせられたるときは直に本校に通告若くは問合ありたし、本校も生徒の事につき心付きたることは直に家庭に通告することを務むべし、かくして家庭の事情は學校に、學校の事情は家庭に報告し、之を機關として雙方親密に氣脈を通せんことを希望せり。

一、右の趣旨に依り、本校より家庭に問合はすことあるときは速に回答せられ、又本校より生徒の父母保證人諸君のご出頭を照會したるときは、可成用事れ繰合の上、即時に出頭せられたし。

一、諸君は其子女の學校にて學びたる事項につき、充分ご注意せらるゝのみならず、時々子女の復習をもご監督ありて、學習を奬勵せられんことを希望す。

以上は本校が諸君、即諸君の家庭と、互に氣脈を通じ、親密に交際を結び、一致協同相提携して教育の正鵠を誤ることなきを期せり。

それ生徒の教育は學校の負擔たるべきこと勿論なれ共、修業の進否は本人の勉勵と家庭に於て、父母或は保證人等の監督注意とに關すること大なるものなれば、若し家庭の教育行屆かざるときは、學校の教育も充分の効績を現はすこと能はざるなり、父母保

證人たる諸君は、茲に深くご注意あらんことを希望の至りに堪へざるなり。　（完）

●坂本未亡人の貞操　黄海の役名譽の戰死を遂げ武名中外に赫々たる、故赤城艦長坂本海軍少佐の遺族は、當時赤坂丹後町なる、安藤貴族院議員の邸内に寓居せる由なるが、未亡人とゑ子は、三人の令孃を相手に、朝夕少佐の追福を祈る外、敎育に餘念なく、三孃が學校の行き歸りには、必ず少佐の靈前に跪拜せしむる事、生に事ふが如く、常に之を戒めて曰く、父上は天晴立派な最期を遂げられたれど、學校の唱歌杯にも、坂本少佐と謡はるゝなり。去れど能々此の邊の道理を辨へて、學問に出精すべし。殊にれ身達は、此母一手に育てらるゝものなれど、行儀作法を愼みて、苟且にも人の口の葉に掛らぬ樣勉むべし。又世間の娘達が、絹衣を着し、綺羅を飾るも、決して羨むべからず。父上が生前の御手紙にも衣服は木綿にも事足れり。絹服杯着る可らずとの事を、常に戒め給ひにき。されど御身等も萬事儉素を主とせざるべからず。とて常に訓戒を加へ、偏に少佐の名を全うせんことを期せらるゝ、其行爲を見聞する人は、深く感賞する所なり、と云ふ。又安藤翁は少佐と同鄕の先輩にして、幼少より其薫陶一に與る處ありしが、戰歿以來遺族保護上に就ても、何呉れとなく、世話せらるゝとなり。

●褒章下賜　賞勳局より左の如く綠綬褒章の下賜ありたり。

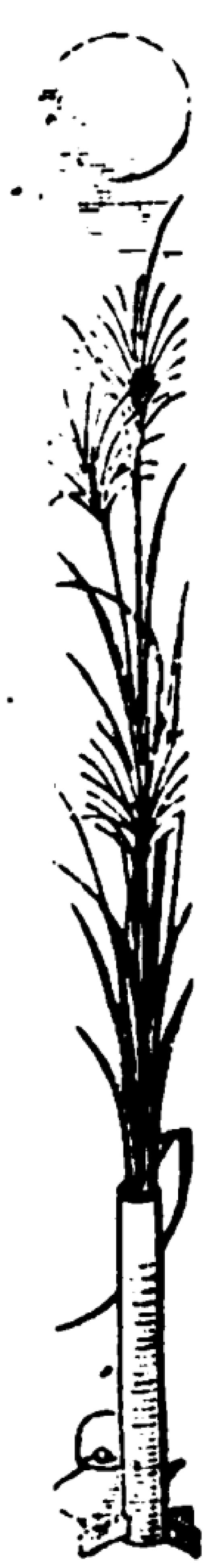
愛知縣尾張國中島郡奥町　野田　とせ

資性誠實幼より渡邊庄三郎の家に傭はれ能く其二兒を保育し庄三郎沒後家道漸く衰ふるに當り幼主を助け織造を起業し經營管理其宜きを得て資產先世に倍蓰するに至れり當主其心實を嘉し悉く家政を委ね之を母視す然れども敢て主從の禮を失はず

錢幣毫も私蓄せず一意主家に竭す四十年の久しき一日の如し洵に奇特とす仍て明治十四年二月七日勅定の綠綬褒章を賜ひ其善行を表彰す

●米國にての『日本物語』　名古屋商業學校長、高柳豐三郎氏の實兄にて、十數年間米國紐育に在る同苗東三氏は、曩に同地新聞記者ローヂャー、リオルダン氏と共に、面白き日本の稗史小說類を飜譯し、之を集めて一卷となし『日本物語』と題して發刊せしに、頗る好評を博したるが、中には源氏物語などもありと、兩氏は今度更に『新日本』といへる書を著す由にて、其素材蒐集の爲め近日日本に渡來すべしといふ。

●一村長壽多　高知縣幡多郡、山中村の内西川村といへるは戶數僅か五十餘戶の小村落なるが、此村に八十歲以上の高齡者十三人あり。何れも健全にして、眼鏡又は杖なども用ゆるものなく、日々家業に従事して、若者の手助けをなすなど、斯く打揃ひ長壽にして、而も健全なるは甚はだ珍らしきことなるが、今彼等が平素に於ける攝生の如何を尋ぬるに、固より田舍といひ、且つは百姓の事なれど、之といふ衛生上の注意とても無けれど、朝夕寢起の時刻嚴格にして、食物は黍、麥、芋等の粗食を常とし、殊に山間の事故、人烟極めて少なき爲め、空氣の流通淸淨なるを以て自然衛生に適し、心氣爽快を覺ゆる由なれど、長壽の要素は、蓋し此等に原因するならんと云へり。兎に角五十餘戶の小村にして、斯かる多數の長壽者を出せるは、實にめでたきことなりと云ふべし。





七月廿日兼題　瀧

天　下谷區仲徒歩町　住山幾子

たきつ瀬の音をきかずは山めひの
　さらせる布と見てやすぎまし

地　豊後國臼杵町二百七十九番地　加賀山やす子

れちたきつ瀧のしら糸くりかへし
　みれどもわかすたきの白いと

人　筑前國嘉穗郡飯東町　廣田とめ子

見にくれは色もかもなきしら糸の
　瀧にこゝろのなとひかるらん

秀逸　（十六首）

岩ろゝく谷間のたきのれときけは　岡田よね子
　結はぬさきもすゞしかりけり

萬代をかけて絶ねせすなかるらん　永井さい子
　龜のをやまのたきのしらいと

いかにして織りはじめけん白糸の　田代艶子
　みたれもみねぬゝのびきの瀧

雲をとり瀧のうろふくけはひして　奥原ふく子
　いは根たはしる那智のれは瀧

水上にくもきりたねすかくれとも　河野文子
　落ちたきつせの音ろさやけき

山ひめのさらす布かとみゆるかな　德永萬壽子
　雲のみねよりれつるたきつせ

山姫のくものころもをぬはんとて　野中あさ子
　たねすくりたす瀧のしらいと

ましらなく聲も聞ねすいははしる　續木かめ子
　みのをの山のたきのしつけき

水かみはいつこなるらん花ちとり　廣瀬きく子
　雪とみだれておつるたきつせ

見あくれは雲よりつゝく心地して　後藤信子
　ろゝろにさむし峰のたきつせ

大御代のなかきためしに引てみん　川田こう子
　名もよろつ世の龜のをのたき

萬代のなかきためしにかゝるらん　有坂清子
　龜のをやまのたきのしらいと

君か代の長きためしにかゝりけん　岡本久子
　雲よりおつるたきのしらいと

いさや手に結ひてもみん面しろく　林　久子
　いはまおちくるたきのしら糸

白糸をあまつをとめやおりつらん　吉村みな子
　くもゐにさらすぬのひきの瀧

きてみれは夏のあつさも瀧つせの　楠瀬とめ子
　みなはときえて涼しかりけり

（以下原稿到着順）

山がつか通ふまにくすゝしさを　甲斐 莊優子
　そへておつるたきのしら糸

あま雲のなかよりおつる心地して　佐々有鄰子
　にしたちわたるなちのおは瀧

巖すらゆらくはかりにきこゆなり　貫井玉子
　よにも名たかきぬのひきの瀧

まつかせにこゑさへそひて熊野川　小野田清子
　たきつ早瀬のみつひゝくなり

みとりなる苔のころもをぬふ糸の　小野田國子
　かけてさらせるたきの色かな

ためしあれはむすひて老や忘まし　貫井染子
　いはほをめくるたきのしら糸

岩の根にひゝきて落つる音きけは　小玉きん子
　瀧見ぬさきもすゝしかりけり

岩かとにくたけて落るしらたまを　田代綾子
　ぬきてさらせる瀧のいとかな

白ゆふの花とも見えていはゝしる　星野弌子
　瀧にあつさもはすられにけり

白糸とことに見えつるたきつせは　星野仁子
　さらせる布としとは見ゆらん

おちたきつ岩瀬の水のはやけれは　北島功子
　なかるゝ月のよとむまもなし

すさましき荒澤やまのたきつせは　北島　松子
なる神かともれもはゆるかな

わら山もくつるゝはかり搖かして　山崎　靜子
雲ゐにひゝくたきのれとかな

操り返し見る凉しさにれり立ちて　羽田　三緒子
身にもかけたきしらいとの瀧

下くゝる袖もたもともぬれさりき　河田　いし子
裏見のたきのそらになかれて

虎やはゆる竜やいてんと思ふまて　香川　英子
なちのたきのとすさましき哉

音にきくれとはの瀧にきてみれは　原　三緒子
きゝしにまさる花のしらたま

山高みそのみなもとの志られねは　倉山　道子
雲より落つるたきとこそみれ

昔よりよにとゝろきてなかるゝを　島田　好子
なとれとなしの瀧といふらん

時ならぬ霧ふりかゝるくろかみの　中島　房子
やまより落つるたきの白いと

治りてれもふことなきみよなるに　野田　千代子
なにをうらみの瀧といふらん

音せすは雲ところみめやままつの　楠　精子
わいたにかゝる瀧のしらいと

岩間よりれつるけしきのわかぬ哉　水島　良子
名に聞ねたるたきならねとも

なかれての末々にてらす山たかみ　松原　常子
くもの中より落つるたきつせ

ほのかにもれとはきこねて遠方の　澤田　俊子
峰よりれつるたきのしらいと

堪へかたき暑もてゝはなつやまに　溝口　直子
凉しさ添ふるたきのしらいと

よそになき凉しき風はきりふりの　溝口　信子
たきのわたりそ夏をわするゝ

音羽山れちくるたきのおとすゝし　溝口　惠子
けさより秋やむすひろめけん

きりふりのたきの白糸よりよりに　小川　金子
とひくる人のたねすもある哉

たよりつゝ花にもみちに結ひけり　小川　富子
となせのれくのたきのしら糸

たきつせを結ひくらして麻ころも　神田　樂子
かさねまほしき心ちこそすれ

岩間より落ちてくたくる白たまは　岡田奈波子
汲むてもたゆき瀧のしたみつ

まつ風にしらへも清くたきつせの　芝田秀子
音もすゝしきかせかよふなり

まつ風のしらへかよひてはこね山　町田鶴子
音もすゝしく落つるたきつせ

たきつせを結びくらゑて夏の日も　大森純子
重ねまほしくなれるこゝろは

足引のやままつかゑの木の間より　大島あい子
はるかにみゆるたきの白いと

布引のさまのしらいといくちすち　荒川清子
落つるをみれど心ろすむなり

やまひめのさらすと見ゆる布引の　小野田とう子
瀧のなかれはすゝしかりけり

心さへすましてみのゝたきつせは　小野田のふ子
老をやしのふなになかれけり

白瀧のいはまにひゝくれときけは　樹下安子
夏のあつさもれもはさりけり

さら〳〵と落つる音羽の瀧のいと　原いち子
よにもしられて涼しかりけり

くりかへし見れともあかぬ瀧の糸　曾山松枝子
清きなかれのすちもみたれす

わかゝへて吹くとも見えぬ朝風に　佐々木千鶴子
靡くとなせのたきのすゝしさ

みづのおとを聞さへすこき奥山に　森川いね子
くる人もなきたきのしらいと

幾千すち落ち來る瀧のしらいとは　増田すゑ子
年へてもなほみたれさりけり

布引のたきのしらいとれとたかみ　松尾こと子
聞きしにまして袖ろすゝしき

立よりていさや結はん此や世に　百瀬八代子
ひゝく音羽のたきのしらいと

行く先はよし遠くともよりて見ん　百瀬かつ子
聞くも清音のたきのしらいと

立ち靡く雲のなかより落ちくれど　勝もゝ代子
ひゝきもたかき那智の瀧つせ

あかつきの鐘の響きをうちそへて　萩原しげる子
音もすゝしききよみつのたき

山深きいはまれちくるたきつせは　上條よし子
夏なほさむきこゝちこそすれ

山たかみ落ちくる瀧をなかむれは　小島小蝶子
あつさわすれて涼しかりけり

岩間よりおちくる瀧をなかむれと　栗田口信子
夏のあつさもわすられにけり

おちたきつ瀧の水かみとめくれは　牧野貞子
岩かねくゝるしつくなりけり

おとにきく那智の高山うち見れと　仁井田とみ子
木かくれおつる瀧つしらいと

谷川のいはまをこえしやまみつの　關千代子
よりてぞおつるたきのしら玉

しつはたの音よりたかく聞ゆるは　關とら子
いはまにひらくたきのしら糸

遙かにもみあくる山のたきつせは　平澤ふさ子
雲よりくもにおつるなりけり

高根より落ちくる水もいはかねに　小町谷里江子
くたけて瀧のなはなかるめり

見あくれはそゝろに寒し夏なから　小町谷園子
落ちくる瀧のいとすこくして

吹くかせに皺のたきのおとさえて　篠塚捨子
みよゆたかなる様もみえけり

年へてもくつることなき布ひきの　佐藤かめを子
瀧のしら糸たれかよりけん

かせ吹けは千々にみたるゝ玉水を　太田たけ子
つらぬきとむるしら糸のたき

岩かねのくたけて落つる心地して　鎌田きくの子
きくもさむけきなゝこしの瀧

足曳のやまのこなたにきこゆなり　武田粲子
たにまとよもす瀧つせのおと

岩かねをうつやつゝみの瀧つせの　石川類子
音もすゝしきしらへなりけり

山高みみねよりおつる瀧のもとは　石川きん子
あたりまはゆく玉ろみたるゝ

岩はしる瀧のしら糸むすひあけて　石川田鶴子
こゝろすゝしく遊ふけふかな

たかくるや音もち節にあくさはの　渡邊すけ子
いはねを傳ふたきのしらいと

夏山のたきのもところすゝしけれ　伊坪ふき子
とひちるみつを風のはこひて

岩はしるたきのしら糸吹きみたす　土肥仙子
風もすゝしきなつのやまかけ

山高みろのみなもとはしらねとも　平山　ふさ子
くもよりおつる峯のたきつせ

たどの山御幸せしよりいく世へて　三浦　時子
いまもたえせぬたきの白いと

しら玉のくたけて清きたきつせの　小幡　千代子
深きこゝろはなつとしもなし

おとは山たきの白いと繰りかへし　山田　ゑい子
見れはこゝろも涼しかりけり

ぬのびきの瀧のはやせの音たかく　小幡富美代子
山のなるかとおもひけるかな

岩根よりみたれ〳〵ておつるかな　小野寺　竹子
さてもすゝしきしら糸のたき

玉とゝふ瀧のしらいとおときよく　土岐　米子
たちさりかねて憩ふやまひと

いかならむうつはをもてか山姫の　杉山　かね子
たえすおり出すぬのびきの瀧

しけ糸のみたるゝごとく見ゆる哉　久松　せい子
いはほをつたふの瀧なかれは

木隠れて瀧はそことも見えねとも　重松　高子
きこゆるみつの音のすゝしさ

ひかりをは岩にのこして夏の日の　野中　ゆき子
あつさをくたく瀧のしらたま

心まてすみわたりけりいはかとに　今藤　なか子
おちてくたくる玉をむすひて

しら雲のなかより落つる瀧つせの　眞鍋　直子
いはにせかるゝ音のすゝしさ

落ち瀧つたきの水かみきてみれは　田津木　久子
こけの下ゆく水にそありける

岩はしるたきの白たまをにぬきて　河野　多加子
きみかちとせの數やよまなん

流れくる水のしらいとうちはへて　河野　八重子
たくみにおれるぬの引のたき

足曳きの山にひとすぢたなびける　河野さまえ子
雲かとみしは瀧にそありける

くりかへし幾よへぬらん絲のをの　青木　恭子
山よりおつるたきのしらいと

みたれ落る水は巖にもつれあひて　津澤　すけ子
しつかくりたすしらいとの瀧

幾そたひ岩にせかれて落ちくれと　富田　まさ子
こゝろは清きたきのしらいと

鳴る神と思ふはかりにきこゆなり　舘脇　ます子
なもとゝろきのやまの瀧つせ

水上はくもにかくれてみよしのゝ　柳田　さと子
山のかひよりおつるたきつせ

酒の香の袖にかをれるおくやまの　吾妻　ちか子
瀧のいつみをいさやくみてむ

岩かねもくたく斗りにすさましき　杉浦　糸子
くろかみ山のみねのたきつせ

岩角にあたるつゝみのたきのおと　池谷　とみ子
ひゝきわたりてすさましき哉

白玉のいはにくたけてちりゆけは　諸井　くら子
あかぬは瀧のなかめなりけり

なく蟬の聲もきこゑすきりふりの　秋原　章子
瀧のあたりはなつとしもなし

きて見れは袖もしとゝに霧ふりの　田中　冬子
すさましきまて見ゆるたき哉

我か國にたくひまれなるなちの瀧　碓井　たけ子
水おとたかくひゝきわたれり

なつやまにおともすゝしき布引の　碓井　武子
たきに我か身をさらしても哉

あしひきの山また山をこゑくれは　碓井　信子
あたり涼しきたきのおとかな

雲井より布ひきしかとみるまてに　伊東　美代子
いはかねつたふ瀧のいとみつ

やま姫のおりてさらせる布ひきの　戶原　とね子
瀧のしらいといくよかゝれる

雲井よりくつれておつる瀧つせの　戶原萬壽香子
岩にくたけてたまろみたるゝ

山の間におちくる瀧のみなかみは　戶原　光子
岩根のこけのしづくなるらん

おとにきく皷の瀧のつはのうちに　戶原　せん子
月もやとりておもしろきかな

わきいつる谷の清水はほそくとも　北村　貞子
なかれてつひに瀧となるらん

見渡せははるかあなたの高根より　冬木　あか子
みなきり落つるなはのあら瀧

松か枝をつたふ岩間のこけ清水　大谷津こと子
つもりて瀧となりにけるかな

いは清水つもり〳〵ておちたきつ　大谷津あや子
瀧のけしきのおもしろきかな

苔むせる岩間のたきのおときけは　植木　とよ子
夏なほさむきこゝちこそすれ

萬代をへてもみたれぬたきみつの　石川　助子
こゝろは人のかゝみなりけり

落ちたきつ瀧の景色はよろめには　平野　とき子
布かとはかり見えにけるかな

こけ清水いはま〳〵をつたひきて　小曾路しう子
世にもしらるゝ瀧となりけん

おちたきつ瀧のあたりは夏なから　名取　正代子
こゝろに寒さこゝちこそすれ

松風のおとにかよひてすゝしくも　小森　さた子
玉とみたるゝたきのしらいと

人のなもかくあらまほし音たかく　降田　まき子
よにきこえけるぬのひきの瀧

みにしみて寒けくなりぬ岩間より　菅谷　とく子
おちくる音もたかまとのたき

君はしてみとりも深きみやまへの　菅谷　こう子
岩ねにひゝくたきかはのおと

すゝみ行くくにのひかりと諸共に　小山　せき子
ます〳〵たかくとゝろきの瀧

音たかく落ちくる水のすゝしきは　大溪　貞子
木のまをわくるたきのしら玉

白雲のたつとみつれはひさかたの　大溪　繁子
空よりおつるぬのひきのたき

松風のこゑなつかしみわけくれは　櫛田　よし子
岩にくたくる瀧にそ有りける

音にきく音羽のたきをきてみれは　西尾　直子
うさもあつさも忘れはてけり

白玉のまなくみたれてしらくもの　鷹野　静子
うへよりおつる布ひきのたき

山たかみくさ木しけれる岩ねより　加藤　壽枝子
みたれておつる瀧のしらいと

白ゆふの深山のおくにかゝれるは　和泉　政子
その名もたかきぬのひきの瀧

音たかく岩根にかゝるしらたきの　平山　峯子
くたけてちるそ涼しかりける

山陰にたきはおつらんまつかせの　和泉　糸子
絶間にひゝくたきつせのおと

こゝのみは秋かとそ思ふ涼しくも　矢島　やす子
いはねにかゝるきりふりの瀧

草も木もかれんはかりの暑さゝへ　井出すゝの子
むかへはうせぬ那智のたは瀧

白雲のひまよりたつるたきつせの　田中　りん子
いはにくだけて玉とちりけり

花とちり雪とみだれてしらくもの　藥師寺　芳子
うへよりたつるみよしのゝ瀧

瀧の音は山もとゝろに響きあひて　竹內　國子
なつなき里にわれはきりけり

七月廿日兼題　苦熱の詞（天地人のほかは原稿到着順なり）

天　播磨龍野　眞鍋　直子

日かげのかたぶくをのみたのみたりしも、この一日二日は、夜さへいとむしあつうて寐られぬまゝに、とく起き出づれど、さすがに、あさは心地もいとすかへしう、窓のもとの若竹も、よみかへりたらんやうにて、いと涼しきに、一日にても、かくながら過しなむと、思ひやらるゝ程もなく、東の空、いといとう赤らみて、さしのぼる朝日の影に、またのちのあつさの一しほたへがたきもしられて、いかにしてこの日をしのがましと、思ひわづらひしにたがはで、朝より少しの曇りもなう、てりはたゝくに、かの若竹も、はやみるかけもなうしをれはてたるさまも、いとあはれに、いかで一雨をと思ひ渡りしほどもなく、いとむしあつき八重雲の立ちいでしに、夕立もやと、いとうれしう思ひたりしかど、ろもかひなくて、いよゝ暑さのみまさり行くに、くるしさいはん方なくてなむ。

墨なせる雲のみ見えて夕立の
ふらぬにいとゞますあつさかな

地　山梨縣甲府市山田町　名取正代子

四の時樂しきもうきもつらきもあるが中に、夏の夕涼むかり心地よきはなく、それに引きかへて照日ざかりのあつさむかりくるしきはあらじかし、ふ二の根の雪も消ゆべく、こがねもとくべく、庭の池水はにへかへり、あらがねの土もさくるむかりかはきはてゝ、草木も枯れなんほどしをれたる樣、げにあはれともいはん方なくて、いかで一夕立もがなとれもふに、雨のけしきはほのかに催しぬれど、ふらでやむ日のあつさなんどは、げにいふむかりなし、さり

ども木蔭にはど、立ち寄りぬれど、葉末にすらそよとの風の音もなく、むし〳〵て、あはれ我身もいかにかなるらんとこうじはてつゝ、たゞにさゝやなる扇の風を命とたのむのみ、かくても夕つかたになりぬれど、やゝ涼しうなりゆきて、よみがへりたる心地のせらるゝもうれし、萬の事みなしかなり、辛苦爲甘味とて、晝の間のあつさを凌ぎ來れどころ、夕風の涼しきを有りがたくはればゆれ、うまきも日毎になるれどうまからずとなり、うきもつらきもしのびてつとめなど、遂には大事なりぬべし。

人　　信濃國下伊那郡山本村　伊坪ふき子

昨日けふの暑さいはんかたなし、書よまんと机に向ふも、えよまれず、文字かく筆もはか〴〵しからず、扇とる手さへものうかりけり、親しき友もがなと思へど、誰しも暑さをたろれてか、つゆたとなふ人もなく、まいて自ら尋ねんと思ふ心も起らず、あなあつや、あなあつやと、うごめくのみ、外をながむれど、日の色は黄ばみて、目くるめく心地し、庭の草木は、皆しをれて、眠りたらんが如く、こをよび起しぬべき風もなく、只苦しげなる蟬の啼き聲の、かまびすしう聞ゆるのみ、

牧野貞子

常磐なる梢の葉さへなえよわりて、そよとの風の音づれもなく、空にはたな引けるくもゝなき三伏のあつさこそくるしけれ、夕立すべく見えし空のあいなく晴れゆきて、やくが如き日影のてり渡りたるに、かしましき蟬のこゑさへくはゝりて、いとわびしく、庭のあたり水などそゝげど、直にかわき、草も木もみなかれたらんが様にて、見るだに心ぐるしう、徒にねむけのみさして、今はた扇もつ手すらおのづから打ちたゆまるゝかし、日にいく度となくぬきかふる衣も、暫しにて汗しばる計りになりぬ、されど何くれとなくなす家の政事などは、手にとるべくもあらず、まして常さへをこたりがちなる文机によりて、書などあさり見るべくもあらず、さるにてもかのてりはたゝきて土さへさくてふ佛のみくに思ひやらるゝぞかし。

佐々有隣子

夏としいへどことさらにくるしきは、終日いてりかはす日影に、扇とる手もいたうたゆげに、庭の木末

をふきわくる風もなく、堀のうちは土さけて龜の甲見たらんやうに、池にあそぶ魚すらもねつ湯をのむ心ちやしつらん、みなうき出てあぎとふさまも、をりからあつさをそふるくさはひとはなりぬ、手がひの翁丸も、日かげもとめて、猫もろともにうちふしたるなど、實に此ごろの苦熱のけしきになんありける、都もひなも、おなじ日影はさりところなくおもはれてなん。

北島松子

月日の駒の足はやく、昨日に變る庭の梢の夏木立、若葉の緑薄く濃く、木の間洩る日の光もまばゆく、目も眩むばかり、晝の最中になれど、裁ち縫ふ業も余りに熱苦しう思ひければ、例のこしをれなど詠み出でんともがけど、歌學びせぬ身なれど、中々にたやすくは詠み出すべくもあらず、心に思ふ半も、口には出でず、筆には猶更かきあへず、もどかしき限りなり、やをら机を放れ、庭におり立てど、うつ蟬の木の間に鳴き渡る聲、中々に喧しく、耳もじひなんばかり、いとゞ頭も重く、心地惡しきこといはん方なし、あはれ颯と吹きくる風と共に、夕立にてもあらむには、いかに凌ぎよからむと思へど、日の光增々かゝやき渡り、そよとの風も訪つれず、こがねしろがねもやがてはとけしつらむ、實に苦しきは都の夏の住居なりけり。

北島功子

さらでだに荒れ果てし賤が伏家の、住みうきを、ふりみふらずみ、空いとふせぎ梅雨も、はや昨日と過ぎ行きて木々の梢も緑漸く深く、木陰のいともなつかしき三伏の夏ともなりぬれど、一日一日に暑さのまさりゆきて、土上はさながら、石も金も溶くるかと思はれ、池中の水は、湧きかへりて、住みゐる魚も、今ははやいり魚にもなりなんかとうたがはるゝ許りなるに、妾の如く、終日おしまづきによりかゝり、物の文など繙きてのみ暮す身も、いとゞ暑さの堪へ難きを、ましてや朝に業を勵み、夕に書物携へて校に登らせ給ふ人々は、そも如何ばかりの苦しみならんと思へど、ろを露ほども汲みもやらで、唯居ながらにして、あな暑しあな堪へ難しなど口ずさまんは、いと〳〵己が氣の儘なる言の葉にも似たらむかし。

佐藤かめを子

この頃はひなも都もおしなべて、暑さはげしき時なるを、まいて今日は空に一むれの雲もなく、日の光りのみ照り輝きて、ために人もむされたる如く、あせは流れて衣をぬらしぬ、かゝる苦しきをりなれど、今はたへかねて、學びの室を立ち出で、此所彼所涼しき風を迎へんと、さまよひ歩めども、只一吹の風だに流れ來ず、垣根のくずの葉さへ中々にうらみいふべきよしもなく、庭の千草も枯れなんばかり打ちしをれ、道行く人も、木かげたづねて立ちとまり、生きとし生ける者、何れか此の暑さに惱まざらん、只少かにうちはの風をたよりに、長きひと日をたへて忍びしが、暮の山際近うなりぬるに、涼しき風も身にしみて、初めていきかへりたる心地すれど、先き程まで枯れんばかりにしをれたる千草の葉も、夕露を帶びて、いみじく嬉しげなるさまなりや。

今藤　なか子

あつし〳〵、あつしとは、昨日今日の言ぐさなりけり、今日しも學びのひまを得たれど、かねて思ひ設けしことゝて、おのがひとへものなどの洗ひはりをぞ始めける、朝間の涼しきうちにといろしみけるも、よろづ拙き身なれど、思ふ樣にはかどらず、日影はやう〳〵さしのぼりてりはたたきて、あらがねのつちもさけなんばかりのまひるとなれど、玉なす汗は衣をうるほし、あかねさす日は手足をやく、其くるしさに、思はず例の言ぐさは、いきとともにもれいでぬ、はては仕事も打ちすてゝ、われ知らず庭の木蔭にはせ行きぬ、こはいかに、よべは秋たちしかとまでおもはれしなつかしの蔭だに、そよとの風もなく、梢になきさわぐ蟬のもろ聲、耳もしひんばかりなるに、なか〳〵に暑さいやましぬ、さりとてはと、内に入れど、下めの飯焚くかまどのけぶりふすぶりて、猶更にあつくもたへなんばかり苦しかりけり、ひとつのたのみは團扇ぞと、取る手もはやくあふぎたつれど、またも〳〵、かねてには似ぬ、なまぬるき風の、なか〳〵に心地あしくればねぬれど、あなもどかしや、なれまでが、わなみをけなけなしてかと、なげやりつ、とやせん、かくやせん、水あびんかと、かこちもだえるぬるに、母人の、あつきは夏のおきてなるものを、かばかりの暑に、なれどかくも苦しきか、御國のため家の爲とはいへ、かの

眞金もとくてふ臺灣に、起きふしせる人々をも思ひやりてよ、こゝらのあつさは、物の數かは、はやく仕事をすまさずやと、さとし給ふに、はつとぞかりに心づきぬ、げにさなり〳〵、母君ののたまふまでもなき事なりしに、あまりの苦しさに、我を忘れし事のあさましや、はづかしやと、思ひつゞくれど、いやましに顔より背より、汗流れ、あつさはいとどまさりぬ、

あゝあつしあつしといひて今日もすぎぬ
あすもかゝらむ身をいかにせん

田津木　久子

あらかねさへもとけなんはかりの此頃のあつさ、いと涼しく見え渡りし庭の木立も、かくをくらきまて茂りあひては、いといふせくのみなり行くに、ましてあつき日に照らされたる、見るたに暑のいやます心地のせられて、いと〳〵たへかたきに、晝過くる頃よりは、そよとはかりの風さへ絶えて、前面を見る目もくらめくはかりなるに、こうしはてゝ、日頃このめるわさとて、いろ〳〵の文ども取りいたして、よみ居しも、これさへやかてうみはてつゝ、たゝ扇の風を命とたのみ思はれて、暮れ行くをのみまちわたらるゝになん、

手にならす扇の風を命にて
けふもわつかにくらしつるかな

加賀山やす子

いつに少なく、今年こそ中々にたへかたき暑さになむ、白金もとくるといひけん三伏の頃はさる物から、伏家の中の苦しさは、甑の中にてむさるゝ心地しぬ、わきて照る日かしこき盛りには、前栽に茂る草木さへ、眠れる如くしをれ果て、涼しく見ゆる庭のやり水も、打ちぬるむ斗り、實にいはんかたなき夏にそなりける、やんごとなきあたりには、世のちりをさけさせ給ひて、夏しらぬ住ひもあめれど、賤が身にありては、思ひに任せぬより、片時も打ち置かで、扇の風をのみ命とたのみ、朝な夕なの涼しさに、少しくいきかへりしこゝちせられ、草木にあらぬ身も、夕立をのみ待ちわぶるになむ。

積木　鑑子

夏木立繁る軒端を通ふ朝風、露の玉散る早苗を渡る夕風、いと涼しき鄙の住居も、あらかねの地も裂く

てふ暑さ眞盛の頃となれど、身を置く方もなき心地して、木陰傳ひ外面に出で、見渡せど、照りはたしく日かげを背にうけて、炎熱に湯となりたる田水に、手足を浸し、流るゝ汗を拭ひもあへず、田草とる賤の男女、鄙ひたる歌唱ひて、わつかに苦熱を慰め顔に働く様、如何に凌ぎ難からん、雲の上なる高殿に、世を安らかに住みなし給ふあだ人すら、夏來ぬれは、都をよそに、塵を隔てし山里、或は又潮風淸き浦傳ひ、かくて炎暑を避け給ふとぞ聞く、哀れ鄙の片邊りに、いぶせく暮らす賤の身は、何處に避けむすべもなく、長き日めもすいそしみて、作りし小田に、豊かなる秋の實りを、一すぢに待ち樂しみてのみ、世を渡るはかなさよ、など、獨り思ひつゝ、たゝずみて、暫し田の面を眺め居し我身、如何にしけむ、目くるめきて、歩む事も叶はず、身も焦げむぞかり苦しきは、扨ては日光に射られしなるへし、人の肩に扶けられて、家に歸りしかど、猶も心にかゝるは、田草とる賤どもいかにしてかく耐へ凌ぐらん、思へどかよわき我身ぞかひなき、さるにても酷しきは此程の暑さよ、殊に往きかひ繁き都のちまた、軒を列ねし市中の住居は、又一入堪へかたかるべし、凡て夏の候となれど、都鄙の別ちなく、種々の疾の流行して、人を損ふ事も少なからず、實に貴き卑き、人も我もれしなべて、恐るべく、いとふべく、また堪へがたきは、此炎熱の苦なるべし、されは各、身に應したる攝養怠るまじき事にこそ。

河野　多加子

一年のうちに、いと〳〵たへがたきは、夏の暑さと冬の寒さとなめり、されど寒さはしのぐべき道こそあれ、夏の日の苦しき暑さのみは、凌ぐべき術のありとも覺えず、今年もいつしか夏の央となりけれど、人々のきたる衣服は、蟬の羽まがふうすものにて、扇など持ちありくも多かり、今日は、たまさかの休日なれど、朝より家にありてはき掃除など終へ、やがて文机に向ひしが、俄に雨雲たなびき渡りて、いといとむし暑く、汗は衣をひたし、うちはの風もなかなかあつさをます心地せらる、かゝる日にも、田作る人々の、外に出でゝさま〳〵いそしみはたらき居るを見れど、日かげにありて、あつさたへがたきなどは、身のわがまゝなりと思ひかへせどかひなし、庭

の木立のかげに立ち出づれど、今日にかぎりてそよ吹く風だになし、あなあつや、あな苦しや、あなうしやと、人々かこち合へりけり、折から、なる神のなりはためくは、白雨のふり出づるならんとて、空のみ打ちながめやらるるもをかしや。

水津　すけ子

閉ぢこめし五月雨の雲はれわたれど、はや繁れる森に、暑をまち顔に、なく蟬のこゑも、なにとなう身にしみわたりて、いよいよ暑をます心ちぞする、きのふまでをやみなくふりつゞきし、糠の如き雨も、いまははれて、日の光もにはかにまさり、書齋にかけたる寒暖計も、いたくのぼりつめ、汗は衣をもひたさむばかりにぬれいで、團扇とる手もやすみなく、をりふし吹きくる風は、ぬるひたるやうにて、さう身はわたの如く、氣力もおのづからおとろへ、緩て見つ、起きて見つ、身のおきどころもなきがごとし、げに俗に釜の中に在るといふも、かくばかりならむなど、獨りごちつゝ、一日〳〵を送るに、暑は初よりもやう〳〵にまさりて、立ち向ふ鏡には、影さむきまでおのが姿のいとやせおとろへ、骨と皮ともてしたるがごとくなるが、うつるを見るにつけても、はかなきことゞもおもひおこさるゝ種とぞなりける、飼犬などの、木の根に片いきになりて、さもくるしげにさまよひありくも、いとあはれなり。あはれ貧しき家に生れたる身は、避暑などいふこともならず、たゞこの飼犬のごとくくるしむのみにて、せむすべもなきことなれど、身は高殿に生ひたちて、おもふまゝならぬはなく、夏はかしこの海水浴、冬はこゝの温泉と、たゞ己れの身の保養、たのしみのみこととする人々は、この犬を見て、いかなる思ひか起るらむ、かくまでにくるしきさまなれども、犬としての本分は盡すめり、さるに萬の物の靈と尊ばるゝ人にして、むなしくすこすべからざる月日を、己れの思ふまゝに、樂みつひやして、美衣と美食に終るものの多きは、まことにあさましくかなしきことのかぎりならずや、外國の諺にも生存中は生活すべしといへるにあらずや、げに人として、この世に生れたる上からは、人として務むべく行ふべき業をば、なさでやはあるべき、さらずは、この犬にも遙かにおとるべきことにてこそ。

碓井信子

今年ばかりのあつさにはあらねど、實に此頃は、荒金もとけんばかりのあつさにて、しのがんすべもなうかうじはてぬ、嗚呼もし男子ならましかば、瀧にてもあびてんものをとつぶやきみれど、女子の身のいかにかはせん、されどあたりすゞしく、塵だにたたぬ片田舍に、別莊とやら設けてしのぎなば、斯くもしのぎがたかるべき事はなけれど、いまだ北貧なく、日々通ふ道すがら、熱砂にさらされ、或は塵風をあびつゝ、玉なす汗をしぼりては、其日を過す身のあつさは、なほも一きはくるしうおぼえて、かくなん。

碓井武子

夏のあつさは理なれど、今年はわけていみじけれど、風清くみどりすゞしき山里のみ、こひしうて、朝な夕な語らひては、晝は氷や團扇の力を便り、やゝ夕風のいづるをまち、はしゐにあつさをやう／＼はらひぬれど、またもあしたのあつさ思ひやられて、都住みは、ほと／＼こうじはてぬ、さはいへ、波路はるけき彼の臺灣のあつさにくらべなば、いまだれとるともまさる事はなきをとは思ひながら、知らず／＼あつしといはぬ日ぞなき、今日もまた汗ながれ出でゝ、くるしさのあまりに、かくなん。

北村孝子

夏引の手引の糸のいとながき此頃の日を、いかに消たんか、照りはたゝく日影は、荒金の土もさくるはかりにて、家の内にあるは、さながらこしきの中に入りて、蒸されたちむやうにて、日にそへ增るあつさ、くらしかたく、日さかりは、命とたのむ風もたえ、夕立のかゝるへく見えし雲もはれて、いと／＼暑さは堪へかたく、まして惡疫さへいきほひ猛になされど、都のちまたにあるは、いとも苦しく、はたあやうし、さりながら、あつしとさけひ、苦しとうめきたりとも、その暑さのきえうすへきにあらす、心をしづかにし、身をやすらかにれきたらんこそ、中々に涼しさは覺えつへけれ、されど、夏の間の、しばしかほどものせんよりは、なか／＼に、常に朝夕の食物、さては運動の身にかなひたらんやう、心したらんこそまさりたらめ、つとめて起き出てゝ、内外のあさきよめなと、何くれと立ちはたらきたらん

こそ、身のために、且は女の道のこよなき業なるべけれ。

北村　貞子

夏の朝とく起き出てゝ、さま〴〵の業、涼しき内になし果さんと、夕にちかひし言のはも、短夜のあけ易く、ねやの窓に、いつしか日の光りまはゆき斗にさすに打ちれとろき、いそぎ起き出でて、さて思ふ事しとけぬ間に、をしや、はやくもま晝頃となりぬ、人々睡氣を催して、あたりいとしづかに、氷賣の聲やう〳〵近付き、梢に噪く蟬の聲、いとかしましく、あつさもとみにいやまして、葉月の地さへ、裂くるはかりに、身にはせみの羽よりもうすき衣をきてすら、消ね入るはかりにて、はてはあつしくるしと罵り、今は唯扇の風をのみたよりとはするなり、されと、我身ひとつの夏にはあらねど、あつさは誰も同じ事と、又思ひ直し、時移れは、すゝ風吹きて、近きほとりの川べに涼納して、ひるまの汗を流さんと、そを楽しみに、夕けの支度にとりかゝりぬ。

高田　清子

夏たちて、まだいくかもあらぬに、昨日今日の、あつさよ、朝の程は、しむし命も、のびん、心地していとど、うれしきに、いつとなく、また、たちかへりて、照る日に、庭の、草木も、しをれうなだれ、まがきの、朝顔、色もなく、あはれに、蟬は、木の葉がくれに、かしましく、坐りても、眠りても、暫こそあれむや、身は重く、頭うつなど、かくては、あまりの、心よわきよと、筆をとり、硯に向へは、流るゝ汗は、衣をうるほし、たのむ扇の、風さへ、なまぬるく、池水のかるゝを見ても、いとくるしく、風は何處に、ねむるにか、軒端の風鈴音もなく、けに身一つの、おき所もなき、心地す、寒くとも、冬は、埋火よ、爐燵よと、凌くてだても、あまたあるを、此の暑さ、凌かんには、よきてだてぞなき、いかにいかにと、とかう、思ひめぐらすはど、なかなかに、あつさいやまし、玉なす汗の、降りそそぎて、さても、あはれあはれ、夏はわびしきものなるかな。

降田　槇子

櫻にあこがれ、柳にひかれて、遊びありきし春も過ぎて、若葉のかげ涼しと思ふまに、夏もいつしかたけ行きて、はとゝぎすの聲は、蟬の鳴くねとかはり、

日の光りは雲なき空にてりはたゝき、そよとの風のおとづれだになく、あら金の土もさけなんばかりにて、夜に入りてもなほ堪へがたく、文よまんも物うく、もの云はんもうるさくて、人もわれも、たゞあつし〳〵と打ちわび、扇手ならしつゝ、秋の立たんをこそねがふなれ、さはあれど、こは時の氣にて、あつきときあつからざれど、天の變り地の災やあらんをと思ひつゞけて、文机に向ひたれど、暑さが爲め、心の駒もゆるみ、手もたゆみて、書き出でん言の葉もなくなん。

太田　さだ子

照りはたゝく日影に、雨のおとづれも、絶えて久しくなりぬる此の頃は、なつかしかりし文机にすら、うとく來て、今は只、扇をのみならさるゝに、かのものがたりやよみてん、くれの文やかきてんなど、賴みにし夏のいとまも、斯くて過ぎんかなどおもへど、いとゞ心もせかるゝを、いでやおもひたちにし一はしをだにと、例のふみとうでゝ、暫しよみもてゆくに、いつしか又うつら〳〵となりゆくに、實に身の置き處もなしやなど、いひつることのはも、今更のやうになん、さるにても、こゝかしこの岸邊に、夏をよそなるあて人の、心のどけさやいかゞならんと、おもふにも、伺ひまなきなりはひに、避暑などの名をさへ、つゆしらぬ、賤がくるしさの、いとも〳〵、おもひやられてなん。

鷹野　節子

たちまち黒雲のふたがりて、雷のとゞろく音のひゞき渡れば、うれし白雨の降り來りて、少しはあつきもさけられんと。つくゑによりて、ひとり涼風まち居れば、只一聲の雷のみにして、空は又もや晴れ渡り、庭に茂れる木々の葉も、しばむかごとく、もとの暑となりにたり、あゝ、など涼風の吹きもせで、かくたへがたき程暑きは。我身のみならんか、否々日頃訪ひつ訪はれつしてむつみ合ひにしともどちも、更に此頃おとづれなきは。暑にたへがたくて、おとのふことのならぬならん、など、一人こちつゝ、つら〳〵と思ひ廻せど、此日頃、苦熱に心うばわれて、ふみも手にせず過ぎ行くは、妾身ながら愚なりとは知りつゝも、くねつをさけん工夫のみ、くりかへし思ひかへし、考ふれど、せんすべなく、ちゞにくるしく

暑さますのみになん。

田中　りん子

草木もしをるゝばかりの夏の日は、いかでたふべき、されど夜のほの〴〵と明初むるに庭のほとりを見渡せば草木にわけける白露も風にこぼれていとうすゞしかりけり、やゝ大空に日の昇りぬれば、石もさながら火の如く垣ひさしにさしこみたる日は身をこかさむばかりなり　世の人のなりはひはさま〴〵にて、身にやけつくばかりの日を脊におひて、荷をはこひ、世わたるやからもあれば、すゞしうもある家に住み、蟬の羽衣をき、あふぎの風に暑さをはらひ、結ふ清水もことにひやゝかなるをねらみなどして、あつさをばしのぎぬれど、夏をわするゝひまもあるらん、いにし夏のことなりけり湯しまのつまこひ坂のほとりに物してけるに、六ろちばかりの賤の翁、腰はさながらあつさの弓のごとく、すがたもいとうやつれ、いきくるしげに重き荷の車を押して、ふといきをつきたるさま見しことありき、あはれこの翁や日のさかりも休らふいと間なく世をわたりかてにするを今思ひ出れば暑のいとゞますこゝちしてなん。

竹内　くに子

いみじきあつさに庭の小川の水さへかれはてゝ、朝がほのはなもはもしをれたる、見る目もたへがたくなくせみのこゑもなにとなう物うくきこゆ、さなくてだに、いふせきいほりのひとしはあつきにくるしくて、針取るも筆とるも心にまかせず、あゆるはたゞあせはかりなり。

八月兼題

五日
- 歌……氷
- 文……避暑

廿日
- 歌……寄海祝
- 文……臺灣戰記を讀む



杉谷正隆編

修身百首

全一冊

菊判美本

近刊

この書は我が國古來の和歌の中につきて修身の訓誡となすべきもの一百首を擇びこれに深切なる義解を附して一讀人をしてその本義を了得し而して大に發明する所あらしむるものあり我が國道德の標準は之を古人の言行にとりて是非善惡の歸を明にするを學者の要務とす淑女諸子乞ふこの篇を讀みて其の德器を養ひ給へかし

東京市京橋區築地二丁目二十一番地

（電話番號一九四六）

發行所　國光社

國光叢誌

本社は、從來『國光』を發行し、忠愛の主旨に基き、政治、教育、法律、經濟等に關する所論を公にせるも、其の範圍該博にして、政論諸說と相混じ、專ら、教育に關する意義を貫徹するに難きが如き憂あり。況や、世運の變遷は、特に本誌を發刊し、大に微衷を吐露して、教育家諸賢の劉覽を請ふ所なかるべからざるの時機に遭際せり。本誌は吾人が專ら教育に關する本來の主旨とする所を陳へ、併せて、同志諸大家の卓說を蒐集し、又、別に、交詢の欄を設けて普く江湖教育家の寄書を掲け、質義應答等をも載せて聊か教育界の木鐸たらむことを期す

七月五日　第一號發行

定價一部金八錢

郵稅不要

第一號目次

●教育家諸君に謹告……前陳の趣旨により本誌發行候間何卒材料となるべき尊稿並に教育に關する實況報告等續々御寄投被成下候はゞ本誌の光榮不過之邦家教育上の裨益も不尠と存候に付何分宜敷御願申上候也

發行所

（電話番號一九四六）

東京市京橋區築地二丁目二十一番地

國光社

生田目經德編

標註 雅文消息集 全

●菊版美本
●全一冊
●定價金廿五錢
●郵稅四錢

日用消息文の摸範は中古文にとらざれば雅馴なる言詞艷麗なる文章を綴りがたし慶長以來文學の大家古文の學を興してより契仲、眞淵、宣長、千蔭、翁麿、濱臣、春海など名家相繼ぎて斯の學を盛ならしめ國文の書世に出づるもの甚多く消息文の如きもその躰大にとゝのひ雅馴にして艷麗なる好摸範も多くあらはれたりしが其の後また多く世に行はれずなりぬ近來國文の再盛なるに方りて之を學ひ日用の消息に適用するはまことに必要のことなりこの篇專心を用ゐて古人の消息中より高尙にして雅馴なるものを採り四季雜の各部に分ち參考者の便よからんことをはかれり國文を修むるもの一本を坐側におきて摸範となさば益を得ること必大なるべし。

東京市京橋區築地二丁目二十一番地

發行所　國光社

（電話番號一九四六）

女鑑第百拾二號目錄

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京銀座郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收證を出さす金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若强ひて領收證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事○未納稅の來書は一切受取不申候事

女鑑
每月五日廿日發行

定價		廣告料
一冊	十錢	五號活字廿三字詰一行金二十錢
六冊(三ヶ月分)	五十五錢	
十二冊(半年分)	壹圓	
全國無遞送料		

明治二十九年七月十九日印刷
同　年七月二十日發行

東京京橋區築地二丁目二十一番地
發行兼印刷人　川崎直衞
同
編輯人　山根勇藏
同
發行所(電話番號一九四六)　國光社

明治二十年九月八日第三種郵便物認可